

超人鬚野博士

夢野久作

青空文庫

吾輩のこと

……何だ……吾輩のみのうえばなし身上話を速記にして雑誌に掲載するか
ら話せ……と云うのか。

フウム。それは話さん事もないが、しかし、選りに選つて又、
吾輩みたいなルンペン紳士……乞食と泥棒の間のあい子みたいな奴の
話を、雑誌に公表する必要がドコにあるのかね。吾輩以上に立派
な地位あり、名誉ある人間が、天の星の如く、地の砂の如く天下
に充満しているではないか。そんな奴とは正反対に、どこにでも
寝る、何でも着る、何でも喰う、地位とか、家柄とか、人格とか

いうものが一つも無い点に於いて天下広しと雖も、吾輩ぐらい不名誉な人間は無いだらう。そんな薄見うすみつともない人間の話が問題になるのかね一体……エエ……何だと……？

しかし吾輩はソナナにも有名なのかノー……。

フーム。有名にも何にも「鬚野博士ひげの」の名前を知らない者は日本中にタダの一人も居ない。吾輩が日本に存在しているために英国も、米国も、露西亞ロシアも、日本に挑戦し得ないでいる。日露戦争以後に吾輩がドンナ科学的の発明を日本の軍部に提供して、ドンナ新鋭の武器を内々で取揃えさしているか判明わからないから……成程のう……それは事実だ。毛唐けとうの奴等もよく知つとるのう。日露戦争の時にヨツポド懲こりたと見えてアラユル密偵スパイを使って吾輩

の身みのまわり辺を探らせているらしいてや。事によると現在、海軍で作りよる一人乗、魚形水雷ぎよけいすいらいボートが吾輩の発明である事を探り出しとるかも知れんのう。ナアニ、饒舌しやべつても大丈夫だよ。毛唐が真似して作つても乗る奴が一匹も居る氣遣いが無いし、防禦ぼうぎの方法が全く無いんだからね。時速百二十節ノット、航続距離二万海里かいりと云つたら大抵わかるだろう。その動力が問題なんだからね。その動力が将来の日本軍のタンク、飛行機に十倍以上の能率を上げさせるんだから恐ろしいだろう。日本国民たるもの枕を高うして可なりだ。つまり吾輩の人格が、全人類を押え付けている……吾輩が、こうしてボロマントを着て、ハキダメから拾った片チンバの護謨靴ごむを引きずって、往來をウロウロしている限り世界の外

交界はこの「鬚野房吉博士」の存在を無視する訳に行かんと考
えている……吾輩を目して新興日本のマスコット……松岡全権以
上の偉人として恐れ戦おののいていると云うのか……。

アツハツハツハツ……宜しい。大いに宜よろしい。気に入った
ぞ。それでは一つ吾輩の正体を明らかにして全世界三十億の蛆うじむ
虫共をパンクさせてくれるかな。とにかく向うの草原くさばらへ行こ
う。あの大きな土管の中で話そう。イヤイヤ。原稿料なんか一文
も要らん。上等の日本酒と海苔のりと醤油があれば宜しい。鮓はやの生乾なまび
が好きなんだが、コイツはちよつと無かろうて……。

感化院脱出

世間の奴はよく吾輩をキチガイキチガイというが、その位のこととはチャンと考えているんだよ。吾輩の過去といたって極めて簡単だ。両親の名前や顔は勿論のことそんなものが居たか居なかつたかすら知らないんだから多分、精神的にも物質的にも生れながらのルンペンなんだろう。孫悟空と同じに華果山カカサンの金の卵から生れた事だけは確実……だろうと思うんだが……アハハ洒落しゃれじゃないよ。

それから十四の年としに〇市の感化院を脱出ぬけだして無一文で女郎買に行つた。ドツチも喜ぶ話だから多分、無料ただろうと思つて行つたのが一生のアヤマリ。女郎屋の敷居を跨またがないうちに吾輩の帯お

びざわ

際を捉まえて、グイグイと引っぱり戻した奴が居る。鯉のアタリよりもチツト大きいなど思つて振返つてみると、タツタ今表口に立つて……イラツシヤイラツシヤをやつていた豚みたいな男だ。感化院を出がけに兄貴分から注意されて来た牛太郎という女郎屋の改札掛がかりはコイツらしい。聞いた通りに派手なダンダラの角帯かくおびを締めていやがる。

「オイ、兄さん。銭ぜにを持っているかね」

と云ううちにその改札屋が吾輩の襟番号えりをジイツと見やがった時にはギョツとしたね。アンマリ気が急せいでいたもんだからウツカリして引剥ぐのを忘れていたもんだが、見破られたと思つたら吾輩はイキナリ焼糞やけくそになつてしまった。

「馬鹿。銭があつたらかかあ嬬を持つワイ。感化院の房公ふさこうを知らんケ
エ」

とタンカを切つてやつたら牛太の奴吾輩の襟首を掴つかんでギュー
ギューと小突きまわした。序ついでに拳固げんこを固めて吾輩の横よこ面つらを一つ
鼻血の出る程く啖くらわしたから、トタンに堪忍袋の緒が切れてしま
つた。さもなくとも燃え上るようなホルモンの遣やり場に困つてい
る吾輩だ。襟首を掴つかんでいる牛太郎の手の甲をモリモリと噛ちみ千
切りぎぎま、持つて生まれた怪力でもつて二十貫ぐらいある豚野郎
を入口の塩しお盛もりの上にタタキ付けた。それから失恋のムシヤクシ
ヤ晴しに、駈付けて来た二三人の人相の悪い奴を向うに廻まわして、
下駄を振上げているところへ、通りかかった角力取すもうとりの木乃伊ミイラみ

たいな大きな親爺おやじが仲に這入はいって止めた。止めたといつてもその親爺が無言のまま、片手に吾輩の襟首を掴んで、喧嘩の中から牛蒡ぼう抜きに宙に吊るしたまま下駄を穿はかしてくれたので万事解決さ。相手のゴロツキ連中もこの親爺の顔を知っていたと見えて、猫みたいにブラ下がっている吾輩に向ってペコペコお辞儀していたが、可笑おかしかったよ。

それからその親爺に連れられて、そこいらの河ツ縁べちの綺麗な座敷に通されてみるとイヨイヨ驚いたね。その親爺が坐まつていても吾輩の立っている高さぐらいあるんだ。どこで胴体つぎたが継足してあるんだろうと思つて荒つぽい縞しまのドテラを何度も何度も見上げ見下した位だ。おまけにツルツル禿はげの骸骨へこみたい凹へこんだ眼の穴の

間から舶来のブローニングに似た真赤な鼻がニューと突出ている。左右の膝に置いた手が分捕ぶんどりスコップ位ある上に、木乃伊色ミイラの骨だらけの全身を赤い桜の花と、平家蟹の刺青ほりもので埋めているからトテモ壯観だ。向い合っているうちに無料でただコンナ物を見ちや済まないような気がして来た。

そこで吾輩は生れて初めて鰻の蒲焼なるものを御馳走になったが、その美味うまかったこと。モウ吾輩は一生涯、この親分の乾児こぶんになつてもいいとその場で思い込んでしまつたくらい感激しちやつたね。

それからポツポツ様子を聞いてみると、その木乃伊ミイラ親爺の商売みせものは見世物師みせものしなんだそうだ。成程と子供心に感心つかまつ仕つたね。

「へエ。オジサンが見世物になるのけエ」

と訊いてやったら、義歯いればを掴つまんでいた親爺が眼を細くしてニコニコした。ピストルの頭を分捕スコップで撫でまわしながら吾輩に盃を差した。

「……マアマア。そんなトコロじゃ。どうじやい小僧。ワシはかるわざ軽業の親分じゃが、ワシの相手になつて軽業がやれるケエ」

「軽業でも、手品でも、カツポレでも都踊りでも何でもやるよ。

しかしオジサン。力づくでワテエに勝てるけえ」

「アハハハ。小癩こしやくなヤマカン吐つきおるな。木乃伊ミイラの鉄五郎を知らんかえ」

「知らんがな。どこの人かいな」

「この俺の事じゃがな」

「ああ。オジサンの事かい」

「ソレ見い。知つとるじやろ。なあ」

「知らんてや。他人のような気もせんケンド……ワテエは強いで。砂俵の一俵ぐらい口で啣くわえて行くで……」

「ホオー。大きな事を云うな。その味噌ツ歯で二十貫もある品物が持てるものかえ」

「嘘やないで。その上に両手に一俵ずつ持つてんのやで……」

「プツ……小僧……酒に酔うてケツカルな」

「ワテエ。酒に酔うた事ないてや」

「そんならこの腕に喰付いてみんかい」

木乃伊ミイラの爺さん一杯機嫌らしく、片肌を脱いで二の腕を曲げて見せると、真四角い木賃宿きちんやどの木枕ちからこぶみたいな力ちから瘤ぶが出来た。指さわで触さわつてみると鉄と同じ位に固い。

「啖くいつ付ついても大事ないかえ」

「齒が立つたなら鰻もを今も一パイ喰くわせる……アイタタタ……待まちて……待まちてチウタラ……」

廊下を通りかかった女中が吃驚びつくりしたらしく襖ふすまを開けたが、木乃伊ミイラ親爺の二の腕に付ついてる濡れた齒型を見ると、呆氣あつけに取とられたまま突立つつていた。

親爺は急いで肌を入れた上から二の腕うでを擦さつた。吾輩わがに喰く付つかれたが、嬉しいらしく女中を振返かえつてニコニコと笑わらった。

「……鰻を、ま一丁持つて来い。それからお爛かんも、ま一本……恐ろしい齒を持つとるのう。ええそれから……そこで給金の註文は無いかや……」

「無いよオジサン。毎日鰻を喰べて、女郎買いに行かしてもらいたいだけや」

木乃伊ミイラ親爺は口をアングリ開あいたまま、眼をシヨボシヨボさせていたが、それで話がきまつたらしかつた。

少年力持

それから後のち、三四年ばかりの間、吾輩は毎日毎日、お祭りの見

物の中で、生命いのちがけの芸当をやった。金ピカの猿股ざるまた一つになつた木乃伊ミイラ親爺の相手になつて、禿はげ頭あたまの上に逆立ちしたり、両足を捉とまえて竹片たけぎれみたいにキリキリと天井へ投げ上げられたり、バスケットボールみたいに丸くなって手玉に取られたりするのであつたがトテモ面白かつた。吾輩わがみたいな身体からだを不死身と云うのだろう。イクラ遣り損なつて怪我けがをしても痛くもなければ血も出ない上に、すぐなに治癒なおる。見物の眼に決して止まらないから便利だ。しまいには木乃伊ミイラ親爺がヤケになつたらしく、吾輩を掴つかまえて死ねかしの猛烈な芸当をやらせ続けたが、どうしても死しなないので驚おどいているらしかつた。

そればかりじゃない。吾輩は別にタツタ一人で時間つなぎに少

年力ちからもち持をやった。自動車に轢ひかれたり、牛の角を捉まえて押しくらをしたり、石ころを噛み割ったり、鉞ぶりき力を引裂いたりする片手間に、振袖を着た小娘に化けて……笑つちやいけない、これでも鬚ひげを剃ると惚れ惚れするような優やさおとこ男だぞ……手品の手伝いみたいなものを遣っているうちに、困った事が出来た。

……というのはホカでもない。前にも云つた通り、コツコツの木乃伊ミイラ親爺と、その頃まではまだ紅顔の美少年だった吾輩が組んで、大車輪で演出する死物狂いの冒険軽業が、吾輩の第一の当り芸であると同時に、この一座の第一の呼物であつたんだが、その芸当の最中の話だ。毎日毎日一度宛ずつ、芸当の小手調べとして親爺と揃いの金ピカの猿股を穿いた丸裸まるはだか体の吾輩が、オヤジの禿頭

の上に逆立ちをする事になつていたんだが、そいつを毎日毎日繰返しているうちに、そのオヤジの禿頭のテツペンにタツタ一本黒い、太い毛がピインと生えているのに気が付いたもんだ。

世の中というものは妙なものだね。その黒い毛の一本が、木乃伊^{ミイ}親爺の生命^{いのち}の綱で、この一座の運命の神様だった事を、その時まで夢にも気付かなかつた吾輩は、その毛を見るたんびに気になつて気になつて仕様がないうようになった。第一いつ見ても真直にピインと垂直に立っているのが不思議で仕様がな。伸びもしなければ縮みもしない。波打ちも、倒おれも、折れも曲りもしないのだから癩^{しやくさわ}に障る。第二に、ほかの処に生えている毛はミンナ真白いのに、この毛一本だけが黒い^けのだから怪しからん。まるで外

国の廻わし者みたいな感じだ。最後に氣に入らないのは、その毛の尖端さきが、ちようど避雷針みたいに、吾輩の鼻の頭と真向いになつてゐる事で、逆立ちをするたんびにその毛を見ると、鼻の頭が思はずズーンと電氣に感じて来る。何だつてこのオヤジはコンナ氣まぐれな毛をタツタ一本、脳天の絶頂にオツ立ててゐるのだらうと思つと、寝ても醒めても苦になつて、イライラして仕様がなくなつた。しまいには毎日一度宛ずつその禿頭の上で逆立ちするのが死ぬ程イヤになつて来た。

そこで吾輩はトウトウ決心をして或る日の事、幕前の時間を見み計はからつて木乃伊親爺ミイラに談判してみた。

「親方。ほかの芸当なら何でも我慢するが、アノ親方のアタマの

上の逆立ちだけは勘弁してくれんかい」

親方は面喰らったらしかった。赤い鼻をチョットつま抓んで眼を丸くした。

「何で、そんな事を云い出したんかい」

吾輩は頭を搔かいた。マサカにタツタ一本の毛が恐ろしく、逆立ちが出来ないとは云えないからスツカリ赤面してしまった。

「何でチウ事もあらへんけんど……アレ位のこと……アンマリ見み易やすうて見物に受けよらんけに、止めとうなつたんや」

「馬鹿奴ばかめえ。何を吐こきくさる。ワレのような小僧に何がわかるか。

あの逆立ちは芸当の小手調べチウて、芝居で云うたらアヤツリ三さん番ばん叟そうや。軽業の礼式みたようなもんやけに、ほかの芸当は止め

てもアレだけは止める事はならん。それともこの禿頭が気に入らん云うのか」

と云ううちにオヤジは渋臭い禿頭を吾輩の鼻の先に突付けて平手でツルリと撫でて見せた。それにつれて頭の上の黒い毛がピインと跳ね返つて吾輩の鼻の頭に尖端を向けた。トタンに吾輩の全身がズウーンとして、お尻の割れ目がゾクゾクと鳥肌だつて来た。吾輩は、思わずその禿頭を平手で押除おしのけた……と思つたが、気が付いた時には、楽屋の荒板の上に横たおしにタタキ付けられていた。アトから考えると親方の虫の居いどころ処どころがその日に限つて日本一悪かつたらしいね。

それから間もなく二人は、満場の喝采を浴びて見物の前に跳り

出た。むろんその時はタツタ今の経緯いきざせつも何も忘れて、僅かの時間、親方の頭の上で辛抱する気になつていたもんだが、その中うちに例の通り、禿頭の上で逆立ちをしてみると……妙だったね。

その時の気持ばかりは今から考えてもわからないんだが、アレが魔が差したとでもいうもんだらうかね。ツイ自分の鼻の先に突立っている毛の尖端さきを見ると、自分では毛頭ソナ気じゃないのに、両手がジリジリと縮んで、赤茶色の禿頭肌はげはだが吾輩の唇はげに接近して来た。そうして、やはり何の気もなく、その禿のマン中の黒い毛を糸切歯の間にシツカリと挟んでグイと引抜いたもんだ。

「ギヤアツ……ヤラレタツ……」

と云う悲鳴がどこからか聞こえたように思ったが、全く夢うつ

つだったね。吾輩の小さな身体が禿頭の上から一間ばかり鞠まりのよ
うにケシ飛んで、板張の上に転がっていた。ビックリして跳ね起
きてみると、直ぐ眼の前のステージの上に、木乃伊ミイラの親方がステ
キもない長大な大の字を描いて、眼を真白く剥むき出したまま伸び
ている。ゴロゴロと喘ぜんめい鳴を起していたところから考え合わせる
とあの時がモウ断末魔らしかったんだがね。

アトから聞いたところによると、親方の木乃伊ミイラ親爺は平生から
吾輩を恐ろしい小僧だ恐ろしい小僧だと云っていたそうだ。感化
院から出て来たばかりの怪物だから何をするか、わからない奴だ。
気に入らないと俺の咽喉のどぶえ笛でも何でも啖くい切りかねないので、毎
日毎日俺に手向い出来ない事を知らせるつもりで、思い切りタタ

キ散らしてやるんだが、実は恐ろしくて恐ろしくて仕様がなから、ああするんだ……と云っていたそうだが、してみると吾輩が毛の根をチクリとさせたのを親方は、吾輩が例の手で禿頭のマン中へカブリ付いたものと思つたらしいね。その後の医師の診断によると、老人の過労から来る、急激な神経性の心臓麻痺まひというのだったそうだが、実に意外千万だったね。そんな馬鹿な事がといつたつて、木乃伊ミイラの親方は、総立ちの見物人と、楽屋総出の介抱と、吾輩の泣きの涙の中に、ホコリダラケの板張りの上で息を取つたのだから仕方がない。

ところで問題は、それからなんだ。楽屋に運び込まれた親方の死骸に取付いてオイオイ泣いているうちに、片っ方で仲間を集め

てボソボソ評議していた拳固げんこの梅という奴が、いつの間にか立上
つて来て、何も知らない吾輩の横つらつ面をガアンと一つ喰らわした
もんだ。このゲンコの梅という奴は、ずっと前に大人の力持をや
つて相当人気を博していたもんだが、アトから来た少年力持の吾
輩に人気を溲さらわられてスツカリ腐り込んでいた奴だ。むろん糞くそぢか
力らがある上に、拳固で下駄の齒をタタキ割るといふ奴だったか
ら痛かったにも何にも、眼の玉が飛び出たかと思つた位だった。
だから、いつもの吾輩だったら文句無しに掴みかかるところだつ
たが、親方の死骸を見て気が弱つていたせいだったろう、起上る
力も無いまま莫塵ごごさの上に半身を起して、仁王立におうだちになつてゐる梅
公のスゴイ顔を見上げた。見ると吾輩の周囲には、梅をお先棒に

した座員の一同が轟々と立ちかかっている様子だ。これは前に一度見た事の在るこの一座のマワシといって一種の私刑だね。それにかかる準備だとわかったから、吾輩はガバと跳ね起きて片頬を押えたまま身構えた。

「……ナ……何をするのけえ」

「何をするとは何デエ。手前が親方を殺しやがったんだろう」

「親方の頭のテツペンから血がニジンでいるぞ」

「あしこから小さな毒針を舌の先で刺しやがったんだろう。最前殴り倒おされた怨みに……」

「ソ……そんな事ねえ……」

「嘘吐け。俺あ見てたんだぞ……」

吾輩は実をいうとこの時に内心すこぶ頗る狼狽ろうばいしたね。タツタ今齒で引抜いた黒い毛は、どこかへ吐き出すか嚙のみこ込むかしてしまっている。よしんば齒の間に残っていたにしたところが、アンナ黒い毛がタツタ一本、親方の禿頭まんなかの中央はに生えている事実を知っていたものは、事によると吾輩一人かも知れないのだから、トテモ証拠になりそうにない。のみならずコンナ荒っぽい連中は一旦そうだと思ひ込んだら山のように証拠が出て来たって金輪際、承知する気づかいは無いのだから、吾輩はスツカリ諦らめてしまった。コンナ連中を片かた端っぽしからタタキたおして、逃げ出すくらいくじの事は何でもないと**思**つたが、親方の死骸を見ると妙に勇氣が挫くじけてしまった。

「……ヨシ……文句云わん。タタキ殺してくんな。……その代り親方と一所に埋めてくんな」

「……ウム。そんなら慥たしかに貴様が親方を殺したんだな」

「インニヤ。殺したオボエは無い」

「この野郎。まだ強情張るか……」

と云ううちに、青竹が吾輩の横つ腹へピシリと巻付いた。

「警察へ渡す前に親方のカタキを取るんだ。覚悟しろ……」

「何をツ」

と吾輩は立上った。親方のカタキという一言が吾輩を極度に昂奮させたのだった。

鞭むちだの青竹だの丸太ん棒だの、太い綱だのが雨あめ霰あられと降りか

かつて来る下を潜った吾輩はイキナリ親方の死骸を抱え上げて、頭の上に差上げた。

「サア来い」

これには一同面喰つたらしい。獲物えものが無いと思つてタカを括くくつていた吾輩が、前代未聞のスゴイ武器を振り翳かざしたのだからね。一同が思わずワアと声を揚げて後あとへ退さがつた隙すきに吾輩は、そこに積上げて在るトランクを小楯に取つて身構えた。ドイツコイツの嫌いは無い。一番最初にかかつて来た奴を親方の禿頭でタタキ倒おしてやろうと思つているところへ、思いがけない仲裁が現われた。

未亡人に救われて

それはこの頃、毎日のように正面の特別席の中央に陣取って、座員全部の眼に付いていたお客で、あれは西洋人だろうか、日本人だろうか……お嬢さんだろうか、それとも奥さんだろうかと問題のタネになっていたシロモノであつたが、近付いて来たのを見ると、何というスタイルの洋装か知らないが、その頃では眼を驚かすハイカラであつたろう。真赤な血のような色をした下着に、薄い、真黒い上うわふく服をピッタリと着込んで、丸い乳と卵たまご型のなりお尻をタマラナイ流線型にパチパチと膨ふくらましている。それが白い羽根付きの黒いお釜かまぼう帽からカールをハミ出させて、白靴下のハイヒールの上にスラリと反そり返つて、縁ふち無しの鼻眼鏡をかけた

ところは、ハンカチの箱から脱出^{ぬけだ}して来たような日本美人だ。年は二十ぐらいい見えたが、実は二十五か六ぐらいいだつたらう。見物席からイキナリ駈^{かけ}上^{あが}つて来たらしく頬を真赤にしてセイセイ息を切らしていたが、吾輩^{わが}が振翳^{ふりかざ}している死骸^{しかい}なんかには眼もくれずに、ハンドバッグの中から分厚い札束を掴み出すと、みんなの鼻の先へビラビラさせて見せまわしながら、ニツコリと笑つた。銀鈴のような嬌^{なま}めかしい声を出したもんだ。

「……サア……皆さん。この坊ちゃんを妾^{わたし}に売つて頂戴。千円上げます。ちようど今日中の上り高^{だか}ぐらいあるでしょ。親方へ上げる妾^{こうでん}の香^{かう}奠^{でん}よ。ね……いいでしょ……いけないの……。いいわ。どうしてもこの坊ちゃんを殺すと云うんなら、妾にも覚悟がある

わ。御覧なさい。この小ぢやな七連発のオモチヤに物を云わせま
すから……妾はこの坊ちゃんに惚れてるんですからね。そのつも
りで話をきめて頂戴……サアサア。警察が来ると話が元も子も無
くなるわよ。サアサア。早いとこ早いとこ。オホホホホホ」
みんなこの別嬪^{べっぴん}さんに吞まれてしまったらしい。イツの間に
かメイメイに持っていた獲物を取落していた。吾輩もソロツと親
方の死骸を下して額の汗を拭いていた。

こうなると話は早い。廿分と経たないうちに、金モール付赤ビ
ロードの舞台服を着た吾輩は、今の別嬪さんと一緒に、その頃ま
で絶対に珍らしかった自動車に同乗して、どこか郊外の山道らし
い処をグングンと走っていた。つまり吾輩はこの、日野^{ひの}亜^{あり}黎^こ子と

いう金持の未亡人に買取られて、郊外の別荘に匿かくまわれて、その未亡人のハンドバッグボーイにまで出世したもんだ。禿頭のオモチャから一躍、別嬪のオモチャにまで出世した訳だね。

イヤ、出世だよ。たしかに出世だよ。墮落じゃないよ。第一昨きのう日までは毎日何度となくタタキ店の瀬戸物みたいに荒板の上にタタキ付けられていた奴が、今日は正反対に真綿まわたづくめの椅子やクシヨンの上でフワフワフワフワと下にも置かず歓待される訳だからね。人生は京の夢、大阪の夢だ。電でん光こう朝ちよう露ろう応おう作さ如に是よ観ぜだ。まあ聞け……そんな経緯わけで吾輩は、その未亡人の手に付くと、お母さんだか妹だか訳のわからないステキな幸福に恵まれながら学問を教おそわった。吾輩を立派な青年紳士に仕立てて見せるという未

亡人の意気込みでね……何でもその日野亜黎子夫人の旦那様だった男は、日野有^{ゆうさく}三九という名前でチャチな探偵小説を書いて、巨万の富を積んだあげく、妻君の精力絶倫に白旗を揚げたような……：そうして揚げたくないような神経衰弱の夢みたいなエタイのわからない遺書を書いてアダリン自殺を遂げた。自分が探偵小説になつちやつたというダラシのない男だったそうだが、そのお庭の片隅に立っている図書館の中には美事な寢室を作つて、あらゆる科学書類、百科辞典、歴史、法律書、小説の類が山積していた奴を、吾輩は未亡人との恋愛遊戯の片手間に一字一句残らず暗記してしまつたものだ。アベコベに未亡人を手玉に取つてやったワケだね。嘘だというなら ^{エンサイクロペヂヤ・ブリタニカ}大英百科全書 のドノ巻のドノ頁の

第何行目に、何が書いてあるか質問してみろ。即答して見せるから……。ソレ見ろ……。

そこで世界の大勢に通じた吾輩は科学なるものに非常な興味を感じたね。早速亜黎子未亡人に甘たれてその図書館の中に立派な実験室を作ってもらった。その実験室で吾輩はチヨウエツチエ超越智チヨウエツチエという毛唐人が発見した脂肪の分解剤を逆に分解して、有効成分だけを取出し、そいつを応用して動植物の脂肪や油をドン底まで分析し、ダイナマイトに数十層倍する猛烈な液体火薬を作り出す事に成功した。

その時は嬉しかったね。まるで世界を征服したような気持だった。あんまり嬉しかったもんだから吾輩はその爆薬の製法を極秘

密の中に日野亜黎の名前で海軍省に投書した後に、その実際の効
果を証明するために、その亜黎子未亡人と合意の上で爆薬情死を
企ててやろうと考えたもんだ。むろんその時分には二人とも青春
なんかドツカへ行っちゃって貧乏屑屋くずやの股ももひき引みたいに、無意味
に並んでいるだけの状態だったからね。吾輩の考えなんか知らな
い未亡人は、今の内閣と政党みたいに心中しましようによ、しまし
ようによって毎日毎日うるさく吾輩に甘たれていたもんだから無論、
異存は無かつたらうよ。そこでその火薬の話を打ち明ける前に、
取りあえず骨休めかたがた、吾輩は娑婆しゃばの見納めのつもりで或夕
方のこと、下町のバアへ一杯飲みに行っているとその留守中に、
その実験室が大爆発してしまったのには驚いたね。否いや。実験室ど

ころじやないんだ。二町四方もあるかと思つていた日野家の屋敷内に在る鉄筋混凝土コンクリートの家作と立木なんか、地の下数千坪の土砂や、女中や、自動車や、未亡人と一緒に大空に吹上げられてしまった……らしいんだ。その時分には酒場でグデングデンになつて狸のきんたま丸の夢か何か見ていたもんだから吾輩は全く知らなかつたんだ。

むろん新聞に出ているよ。君等が生れない前の初号三段抜きだから、今で云つたら号外ものだろう。……亜黎子未亡人の前の夫、日野有三九という男は生前に非道ひどい神経衰弱にかかつていた者だが、自分の死後、精力絶倫の亜黎子夫人が必ず不倫の行跡に陥るべきを予想し、嫉妬の念に堪たえず、これに対する深刻な復讐の準備

備を整えていた。すなわち自分の建てた図書館内の豪華を極めた
寝室に、自分の死後三年目の或る夜半に相違なく発火するように
工夫した精巧な時計仕掛の爆薬を装置していたものであるが、そ
のような事実を夢にも知らなかった淫婦の亜黎子は、亡夫の予想
通りに有名なる曲芸師の不良少年をその室へやに引っぱり込み不義の
快楽に耽たつていた結果、まんまと首尾よく亡夫の詭計ぎけいに引つかか
ったのが、この大爆発の真相に相違ないのである。敏腕を以て聞
こえた当局も、流石さすがに斯様かような超特急の椿事ちんじに遭遇しては呆然ぼうぜんと
して手の下しようもなく……云々……といったような事を筆を揃
えて書立さだめていたが、流石さすがの吾輩もこの記事を見た時には文字通
り呆然、啞然としてしまったね。日本の新聞記者が、これ程まで

に素晴らしい作家だとはこの時まで気が付かなかったからね。

……ナアニ……あの実験室に立入る人間は亜黎子未亡人だけだからね。多分、彼女が吾輩の留守中に眼を醒まして、吾輩が作り溜めていた液体火薬に手を触れるかドウかしたんだろう。アルコールに溶いた甘ったるい、赤黄色い火薬を、ベルモットの瓶に詰めて、塩と氷に詰めて冷蔵しておいたんだから、事によると酒と間違えて未亡人が喇叭ラッパを吹いたのかも知れない。そいつが腹の中の体温で発火してアレヨアレヨと驚くトタンに、三町四方の靈魂がフツ飛んだんだから思い残す事は無いだろう。もちろん吾輩もアンナに猛烈な炸裂力を持っていようとは思わなかった。分量が二倍の時には四倍の熱……四倍の時には二百五十六倍の高熱を発

する事だけは知っていたがね。アトでその爆発の遺跡あとをコツソリと見に行つた時には文字通り「人間万事夢だ」と思つたね。直径二三町、深さ二十間ぐらの摺鉢形すりばちがたの穴が残つていただけだからね。それ以来何もかも夢だという事をハッキリ自覚した……女ばかりじゃない。人間万事が何一つ当てにならない事を自覚した吾輩は、越えつちゆうふんどし中な禪ぜんの紐ひもが切れたみたいな人間になつてしまつた。する事な為す事が、一つも手に附かない。面白くも可笑おかしくもないが、そうかといつて死にたくも生きたくもないといつたようなアンバイでブラリブラリやっている中うちに、イツの間にか現在の職業に転落して来ると又、世の中がチツトずつ面白くなつて来た。何しろ世間の人間が殆んど氣附かないでいて、ステキに儲かる

商売だからね。又気付いたにしたところが、滅多めったに手を出せる商売でもないんだがね。イヤ。詐欺でも泥棒でも、乞食でも何でもない。そんな間まだるっこいヘゲタレ商売とは夕チが違うんだ。詐欺と泥棒と乞食の上を行く商売だ。毎日毎日往來を歩きながら、オール日本人の生命いのちの綱を握っていようという、警察でも大学でも吾輩の前には頭が上らない上に、毎日美味うまい酒が飲めようというんだから大した商売だろう。

……そんなドエライ商売がどこに在るか……ここに在るんだ。この破れマントのポケットの中に在るんだ。今見せてやろう。ホラこの通りだ。

博士製造業

何を隠そう。吾輩の職業というのは医学博士を製造するのが専門だ。

笑っちゃイカン。世の中に何が気楽だといったって医学博士を製造する位ワケのない仕事は無いんだ。一人前の掏摸すりやテキ屋を作るよりもヨツポド容易やさしい仕事なんだ。

先まず博士の卵を探し出すんだ。博士の卵なんて滅多に居ないよ。うだが、気を付けてみると虱しらみの卵と同様、そこいらにイクラでも居るんだ。天下の青年ことごとく、悉博士の卵ならざるなしと云つていい位なんだ。

その中でも理窟の強い奴の方が見込がある。何でも理窟の世の中だからね。「親は何故なにゆえに吾々を生みたるや」ナンテいう余計な事を、一生懸命に考え詰めて、何でもカンでも理窟に合わせてしま終わしまないと鳥目だの、近眼ちかめだの、神経衰弱になる位、熱心な奴ならイヨイヨ上等だ。

その結果「親は面白半分に吾々を作りし者也」と解決を付けた奴は取敢えずアメリカあたりの文学博士になる奴で、「故に吾々は親に対して責任無し」と結論する奴はソビエツト直輸入の赤い法学博士の卵だろう。「1×1=1」なるが如しと論ずる奴は多分の独逸ドイツ工学博士を含んだ卵で、「親は自分の老後を養わせむために吾々を生みし者也」と解釈する奴は仏蘭西フランス経済学博士の輸入

卵と思えばいい。「その理由を発見する能^{あた}わず」と叫ぶ奴はソックリそのままイギリスの哲学博士で、従つて「結婚の生理的結果也」と感付いた奴が、最有力な日本の医学博士の雛^{ひよ}ツ子になる訳だ。

そんな奴に「人間に喰付かれた犬は如何なる病気を感染するか」とか「猫の失恋ヒステリーの治療法如何^{いかん}」とかいったような問題と一緒に、数十匹の犬や猫を宛^あてがつておくと大抵、半年、乃至^{ないし}三年ぐらいで解決して来る。「人間に喰付かれた犬は泥棒犬になる」とか「三味線に張つて猫ジャ猫ジャを弾く」とかいう論文を提出して博士になる。

ナア二、吾輩が論文を書いてやるんじゃないよ。その研究用の

犬や猫を提供するのが吾輩の本職なんだ。イヤ、笑いごとじゃないよ。そこいらの大学や医学校なんか吾輩が居なくなったら、たちま忽ち一切の研究が停止するんだから大したもんだらう。

その犬や猫をどこから仕入れて来るかって。アハハ。仕入れて来るといえば立派だが、実をいうと拾って来るんだ。往來の廢物を拾い集めて、博士製造の材料に提供する商売だから非常な国益だらう。むろん鑑札も免状も、税金も何も要らない。商売往來にも何も無い。天下御免の国益事業だ。

もちろんこの商売を公認させるには相当の骨を折っている。この商売を初めてから間もなく、警察へ引っぱられて調べられた事がある。

「イクラ無鑑札の犬でも、持主の承諾を経ないで搔かつ浚さらいをするのは怪けしからんじゃないか」

とか何とか、お説教じみた事を吐ぬかしおつたから吾輩、一杯景気で、逆襲を喰わせてやった。

「利いた風な事を云うな。日本の警察はまだまだズツと大きな罪悪を見逃がしているんだぞ。彼かの活動写真屋を見ろ。あんな映画を一本作るために、映画会社が何人の男女優を絞め殺したり、八ぎりツ切にしたりしているか知っているか。しかもその俳優たちは、みんな町から拾って来た良家の子女ばかりじゃないか。まして況いわんや彼かの議会を見る。何百の議員の首を絞めたり、骨を抜いたり、岳詰かくづめにしたりして富国強兵の政策を決議させる。その議員という

のは政党屋が、全国各地方から拾い上げて来た我利我利者ばかりじゃないか。吾輩が、町から拾って来た動物のクズを殺して、博士を作るくらいが何だ」

とか何とか煙けむに巻いて帰って来たが、妙なものでソレ以来スツカリ警察と心安くなってしまうもんだ。

見たまえ。この通りマントの袖の内側全部が袋になっている。これは吾輩が自身にボロ布ぎれを拾って来て縫付けたもので、このポケットは木綿の手織ておりじま縞だ。こつちの大きいのは南洋更紗さらさの風呂敷で、こつちのは縮緬ちりめんだから二枚重ねて在る。これが吾輩独特のルンペン犬の移動アパートなんだ。

このアパート・マントを一着に及んで、これもこの通り天井に

空気抜ぬきの付いた流行色の山高帽を冠かむつて、片チンバのゴム長靴を穿はいてブラリブラリと市中を横行していたら、いい加減時代後おくれの蘭らんぼう法医師ぐらいには見えるだろう。ナニ、モット恐ろしい人間に見える。

フーム。天幕テントを質に置いたカリガリ博士。書齋を持たないファウストか。アハハ。ナカナカ君は見立てが巧いな。吾輩を魔法使いと見たところが感心だ。

いかにも吾輩が犬を拾う時の腕前は、たしかに魔法だね。到る処の往来にチョコチョコしている仔犬だの、前脚あごに顎あごを乗つけて眠っている犬などを、通っている人間が気付かない中うちにサツと引搦ひんで、電光石火の如くこのマントの内側の袋アパートへ搦ひみ込

むんだ。

知っているかも知れないが犬の首ツ玉を掴むには一つの秘伝があるんだ。これは熟練すると何でもないがね。犬の首ツ玉の耳のうしろ背後よりも少し下った処……八釜やかましく云うと七個ななつ在る頸骨けいこつの上から三つ目ぐらいの処をチョイトつま掴むと、ドンナ猛犬でも頭がジンとなつて、この人にはトテモかな敵わない。絶対服従といったような気分になるらしいね。眼を細くしてチョイと麻酔したようなかっこう恰好で、気持よさそうに手足をダラリと垂れる。心安いブルドッグか何かを相手にして実験してみたまえ。殊に医学の実験用に使う犬だったら、そんなに大きな犬でなくて良いのだから訳はないよ。そこを掴むと気持がよいと見えて、啼きもどうもしないか

らね。

ところでこのアパートへ這入ると別に看板をかけている訳ではないが、長い間の老舗しにせの臭いがするらしく、犬の奴が安心すると見えてワンとも云わないでジツとしている。仔犬なんかだと、別れたお母さんの臭いでもするんだらう。クンクン啼出なきだす事もあるが決して出て行こうとしないから安心だ。電車に乗っても発覚しない事が実験済みなんだから平気なもんだよ。

そんな訳で町から町をブラブラして手に入れた犬を大学や医学校へ持って行くと、博士の卵が待ちかねていて、一匹八十銭から二円五十銭ぐらいで買ってくれる。平均すると衛生学部が一番高価くて、生理や解剖が一番安いようだ。これは衛生学部だと狂犬

病の実験に供して、高価たかい予防注射液を作る資本にするから、割に合うので、生理や解剖だと切積きりつもった研究費で博士になろうと思つてたけのこいる筈連中が、単なる使い棄てに使うつもりだからだろう。勿論、学生上りだからといったつて馬鹿には出来ない。相当、足元を見る奴が居るので油断が成らないが、非道ひどい奴になると吾輩を乞食扱いにして値切る奴が居る。

「オイ、鬚野ひげの先生。三十銭に負けとき給え、ドウセ無料ただで拾つて来たんだろう」

そんな奴には、よく犬コロをタタキ付けてやったもんだ。横よこつ面つらを引つ搔かれたり、眼鏡を飛ばされたりして泣なきつ面つらになつて謝罪あやまる奴も居た。

「篋べらぼう棒めえ。無代ただで呉れてやるから無代で博士になれ。その代り開業してから診察料を取ったら承知しねえぞ」

天狗猿教授

……どうしてソナ奇抜な商売を思い付いたかつて云うのか。
ナアニ、吾輩が発明したんじゃない。向うから発明してくれたんだ。

前にも話した通り吾輩は、パトロンの有閑未亡人ありこ亜黎子あさんの爆発昇天後、世の中が紐ひもの切れた越え中ちゆうふんどし 中 禪ちんみたいみにズツコケてしまつて何をするのもイヤになつた。毎日毎日どこを当てども

なく町中をブラブラして、料理屋のハキダメを覗きまわったり、
河岸縁かしつぶちの蟹かにと喧嘩したり、子供の喧嘩を仲裁したり、溝どぶに落ち
たトラツクを抱え上げてやったりしているうちに或日の事、大学
校の構内へ迷い込んだ。吾輩これでも亜黎子未亡人のお蔭で、世
界有数の大学者になっているんだから、学問の臭いを嗅かぐとなつ
かしい。どこかで学者らしい奴にめぐり会わないかなあ、会つた
ら一つ凹へこましてやりたいがなあ……なんかと考えながら来るとも
なく法医学部の裏手に来ると、紫陽花あじさいの鉢を置いた窓から吾輩を
呼び止めた奴がある。

「オイ君君……君……ちよつと……」

見ると相当の老人だ。顔が天狗猿てんぐざるみたい^にに真赤で、頭の毛が

テリヤみたいに銀色に光っている奴をマン中から房々ふさふさと二つに別けている。太眉ふとまゆが真黒で髯ひげは無い。そいつが鼻眼鏡をかけて白い服を着て、紫陽花の横から半身を乗出したところは何となく妖怪じみている。処女見たいな眼を細くして金歯をキラキラ光らしているから一層、気味が悪い。一見して容易ならぬ学者だという事がわかる。

「……君……一つ頼みたい事があるんだが」

学者だけに常識が無いらしい。初対面の人間に物を頼むのに、窓越しに頼むという法は無い。吾輩も腕を組んだまま、振返って返事してやった。

「何の御用ですか」

天狗猿がニツコリと笑った。

「君は実験用の犬屋だろう」

吾輩は面喰らった。そんな商売が在る事を、その時がその時まで知らなかったもんだから思わず自分の姿を見まわした。成る程、煙突の掃除棒みたいな頭に底の無いカンカン帽を冠かぶっている。右の袖の無い女の単ひとえもの物の上から、左の袖の無い男浴衣を重ねて、縄の帯を締めている。河岸の石垣の上から穿はいて来た赤い鼻緒のひよりげた日和下駄ひなげを穿はいているが、これはどうやら身投女の遺留品らしい。成る程、実験用の犬屋というものはコンナ姿のもんかなと思つたから黙つてうなずいた。天狗猿もうなずいてポケットを探りながら半分ばかり残っている朝日の袋とマッチを差出した。

「吸わんかね……君……」

「呉れるんですか」

「うん。君は好きだろう。齒が黒い」

吾輩は気味が悪くなった。天狗猿の奴、吾輩を吞込んでい
ら
しい。

「まあ御用を承ってからにしましょう」

「アハハ。恐ろしく固苦しいんだね君は……ほかでもないがね。

実は今まで僕の処に出入りしていた実験用の犬屋君が死んじやつ
たんだ。腸チブスか何かだね。おかげで実験が出来なくなつて困
っているのは僕一人じゃないらしいんだ。本職の犬殺し君に頼ん
でもいいんだが、生かして持つて来るのが面倒臭いもんだから高た

「やってみてもいいですが、資本が要りますなあ」

「フウン……資本なんか要らん筈だがなあ」

「要りますとも……犬に信用されるような身姿みなりを作らなくちや……

……

「アハハ、成る程……どんな身姿かね」

「二重マントが一つあればいいです。それに山高帽と、靴と……」

「恰ちやうど度いい。ここに僕の古いがある。コイツを遣ろう」

と云ううちに最早もう、古山高と古マントと古靴を次から次に窓か

ら出してくれたので、流石さすがの吾輩も少々煙けむに巻かれた。

「洋傘こうもりは要らんかね」

「モウ結構です。先生のお名前は何と仰おっしゃ言るのですか」

「僕かね。僕は鬼目おにめという者だ。この法医学部を受持っている貧乏学者だがね」

吾輩は思わず貫い立ての山高帽を脱いだ。鬼目博士の論文なら嘗かつて亜黎子未亡人の処で読んだ事がある。その頃まで、三十年前頃までは、微々として振わなかつた日本の法医学界に、指紋あと足痕しあとの重要な研究を輸入した科学探偵の大家だ。

「学界のためだ。シツカリ奮闘してくれ給え。君を見込んで頼むんだ」

「しかし……しかし……」

「しかし何だい。まだ欲しいものがあるかい」

「イヤ、先生はドウして僕が、この仕事に適している事をお認め

になつたんですか」

「アハハ、その事かい。それあ別に理由わけは無ないよ。君の過去を知つてるからね」

「エツ、僕の過去を……」

「僕は度々君の軽業を見た事があるんだよ。君がドコまで不死身なのか見届けてやろうと思つてね。毎日毎日オペラグラスを持つて見に行つたもんだよ。だから君があミの木乃伊イ親爺を殺したホントの経緯いきさつだつて知つているんだよ。あの未亡人を爆発させた火薬と、バルチック艦隊を撃沈した火薬が、同じものだつてことも察しているんだよ。ハハハ」

吾輩は聞いているうちに全身が汗ビツシヨリになつた。コンナ

頭のいい恐ろしい学者が人間世界に居ようとは夢にも思わなかった。たので今一度シャツポを脱いで窓の前を退散した。

人生意気に感ず。武士は己おのれを知る者のために死すだ。考えてみると吾輩というこの人間の廃物を拾い上げてくれた奴は、次から次に、吾輩のために非業ひごうの死を遂げて行くようだ。最初が木乃伊ミイラ親爺、その次が有閑夫人亜黎子、いずれも吾輩と似たり寄つたり。の廃物揃いであつたが、今度はどうして廃物どころじゃない、日本第一の法医学者、鬼目博士と来ているんだから間誤まごまご間誤まごまごしていとこつちが位くら負けけして終しまうかも知れない。むろんこつちでも恩あだを仇あだで返すりようけん了りようけん。簡かんなんか毛頭無むいんだが……とにもかくにも吾輩の博士製造業……往來の犬生かし事業は、こうして天狗猿の鬼

目博士から授さずかったものなんだ。

ウンコ色貴婦人

そうだよ。目下のところ、吾輩は犬が専門だよ。以前もとは猫もやっていたが、アイツは中々手数がかかるんだ。

猫という奴は芸者と同様ナカナカ一筋縄では行かない。ニヤアニヤアいつて御機嫌を取るようだが、元来は猛獣なんだからそのつもりでないといひひどと非道い目に会う。その猛獣一流のハツキリした個人主義を伝統していて、自分以外のもの一切を敵と心得ている奴が猫だ。物蔭から「フツ」というと間一髪と同時に身構えると

いう、講道館五段以上の達人だから容易な事では手に合わない。もつとも蝮まむしを手掴みにする商売人も居るんだから練習すると相当に掴めるんだが、持って帰るのが面倒だ、中々マントの内ポケットにジツとしてなんかいないんだから袋の口を釦ぼたんで止めとかなくちやならん。

だからコイツは釣るの一手だ。何でも構わないからコマギレを引つかけた釣針に糸を附けた奴を、人通りの無い横露路か何かで、適当な猫の隠れ場所の在る近くに結び付けておくと、奴やつこさん、散歩の序ついでに通るかかって引つかかる。チクリと来ると吐出はきだすが又、喰う。そのうちに鉤かぎが舌に引つかかるんだが、引つかかったら最後、決して啼かないから妙だ。

「ミイやミイや」

なんて抱かかえぬし主まが探しに来ててもジイツと塵ごみばこ箱の蔭なんか隠

れてしまうからナカナカ見付からない。頃合いを見計らつて、そいつを拾つてまわると一日に五匹や六匹は間違いない。釣針に附いた糸をマントのボタンに捲まきつ付けておけば神妙に黙つたまま藻も搔がいている。

「まあまあ可愛かわいそう相に……コンナ非道ひどい事をして……ジツとして

おいで、外はずして上げるから。イクラお肴さかなを盗んだつてアンマリじやないか。死んだら化けて出ておやり。憎らしい……」

なんていうのには百の中うち一つも行当らない。

もう一つ猫をやめた理由は、ドウも犬と猫との間に需要、供給

の不公平があるらしい。犬の余り物の方が實際上、猫よりも遥かに多いんだ。

俗に三味線太鼓といつて三味線は猫の皮、太鼓は犬の皮ときまつているらしいが、猫の皮は日本国中、自惚うぬぼれと瘡毒かさげ気の行渡る極み、津々浦々までペコンペコンとやっているが、太鼓の方はそうは行かない。イクラ非常時だからといったつてあつちへドンドンこつちへドンドンやっていたら日本中が「お月様イクツ」になつてしまう。だからワンワンの廃すたり物の方がニャアニャアのルンペンよりも遥かに多い訳だ。

もつと尤もいくらワンワンだつて、無鑑札の廃物ばかりを狙っている訳じゃない。時には必要に応じて有鑑札のパリパリを狙う事もある

る。コイツは極く内々の話だがトテモ珍妙な事件が在るんだ。ツイこの頃の事だ。

今云つた天狗猿博士の乾分こぶんで、法医学の副手をやっている男が、是非とも中位のセパードが一匹欲しい。軍用犬の毒物に対する嗅覚と、その毒物に対する解剖学上の反応を調べてみたいのだが、ナカナカ手に入らないので困っている。金は十円ぐらいまで奮発するから一つやってくれ。鬚野先生以外にお頼みする人が居ないのだから……と恐ろしく煽動おだてやがったから特別を以て引受けてやった。

そこでその副手から鋭利なゾリンゲン製の鋏はさみを一挺借りて、その日一日中と、あくる日の夕方までかかって市中の屋敷町という

屋敷町をホツキ歩いたが、誰でも知っている通りセパード級の犬になるとどこの家でもナカナカ外へ出さない。タマタマ出しているてもゾツとする位大きな奴だったり、頑丈な男が鎖で引っぱっていたりして注文通りの奴に一度も行当らない……これでは日当にならない。ほかの雑犬を漁あきつて数でコナシた方が割がいい。これ位で諦あきらめて銚しやうを返してしまおうか知らんと胸算用をしいしい来るともなく、市内でも一等繁華な四角よつかどの交叉点こうさてんへ来てて、ボンヤリ立っているうちに、居た居た。生後三箇月ぐらいの手頃のセパードで、お誂あつらえ向きに革の細い紐で引っぱられている。しかも引っぱっている奴は四十五六ぐらいに見える貴婦人だ。

吾輩は元来、貴婦人氣取の女が嫌いだね。都合よくエライ親父

かエライ亭主に取当つたのを自慢にして、ほかの女とは身分が違
うような面付かおつきをしている……その根性がイヤなんだ。貴婦人と
普通の女の違いは、債券に当つた奴と当らない奴だけの違いじゃ
ないか。

しかもその身分違いをハッキリさせるために、平民が寄付けな
いようなドエライ扮装を凝こらしやがる。薄黒いドーナツ面づらへ蒔こんに
蕪やくの白和しらあえみたいに高価たかいお白粉しろいをゴテゴテと塗りこくる。自
分の鼻が慣れつこになればなるほど、強烈な香水を振りかけるか
ら、何の事はない、塗り立てのコールタールだ。目の見えない奴
は新しいポストと間違えて避よけて行くだろう。気の強い奴は処女
に見せかける了簡と見えて、頬ペタをベタベタと糞うんこ色いろに塗上

げている。おまけに豚の尻けつみたいな唇を鮮血色いろどに彩いろどっているから、食後なんかにお眼にかかるとムカムカして来るんだ。特権階級を氣取るつもりらしく、ヤタラに銀狐の剥製か何かを首に巻いているが、その銀狐の面付つらつきの方が、直ぐお隣の御面相よりもよっぽどシヤンなんだから滑稽じゃないか。のみならず、せめてブルドッグでも召連れていれば多少の参考になるところだが、選よりに選よつて眉目清秀のセパードなんかを引っぱっているからイヨイヨ以て助からない。

冒険大泥棒

その繁華な交叉点で吾輩がぶつかつたのは、ちようどその助かない種類の貴婦人だつた。全体にムクムクと膨れ返つて、大水で流れて来たか、花火から落ちて来たみたいな四五六の処女らしい身装みなりの奴が、ゴーストツプの開くのを待っているらしく、航空郵便の横に突立つて、白ペンキ色の襟首と、毒々しいウンコ色の横顔を見せている。これじゃ何ともなくともチョット悪いたずら戯をしてみたくなる恰好じやないか。

しかし吾輩は考えたよ。

ここは恐ろしく場所が悪い。ちよつとでも通行人に気付かれたら運の尽きだと思つたが……しかしだ。「天の与うるところのものを取らずんば、取らざるに勝まさる後悔あり」とね、「機会きかいは再び

来らず」という鼠小僧の遺訓を思い出したものだから一つ思い切
って決行した。貴婦人が引っぱっている革の紐のたるんだところ
を目がけて、例の鋏でチョン切る。トタンに例の手で犬をポケッ
トに納めるといふ離れ業を試みた……。

……つもり……だったがアニ計^{はか}らんやだ。天なる哉^{かな}、命^{めい}なる哉
だ。アニが計らずに弟が計ったものと見えて、革の紐をチョン切
ったトタンに向うのゴーストツプが青に変わった。トタンに待構え
ていた貴婦人が向うへ歩き出す。トタンに手の革紐が軽くなった
のに気が付いて振返る。トタンに吾輩が犬の首ツ玉を吊るしてポ
ケットに半分納めかけている現場が見えた。トタンに失策^{しま}った：
……と思った吾輩が、その貴婦人のヨークシャ面^{づら}を睨んでニタニタ

と笑って見せた。トタンにその貴婦人が、鳥だか獣だか、わからない声をあげてフラフラと前へのめつた。トタンに横合いからすべって来たドツジの箱自動車セダが、その貴婦人の在りもしない鼻の頭を、奇蹟的に突飛ばして停車した。トタンに貴婦人の意識にも奇蹟のブレーキが掛かったらしく両足を上にしてヒヤーツと顛覆てんぷくする。トタンに吾輩が投出したセパードが御主人のお尻の処を嗅ぎまわって悲し気に吠え立てる。トタンに通りかかった野次馬がワアーと取巻く。そこいら中がトタンだらけになっちやって、何がどうして、どうなったんだかテンヤワンヤわからない状態に陥ってしまった。

これを見た吾輩はホツとしたね。この調子なら吾輩が仕出かし

た事とは誰も気付くまい……と思ったから何喰わぬ顔で野次馬を押分けた。その伸びちやつている貴婦人の頭の処へ近付いて大急ぎで脈を取って見た。それから^{まぶた}瞼を開いて太陽の光線を流れ込まして見ると、茶色の眼玉を熱帯魚みたいにギョロギョロさしている。たしかに、まだ生きている事がわかったので今一度ホツとしたね。

「ワア……テンカんだテンカんだ……」

「そうじゃねえ、行倒れだ」

「何だ何だ。乞食かい……」

「ウン。乞食が貴婦人を診察しているんだ」

「……ダ……大丈夫ですか」

とドジを踏んだ運転手が、吾輩の顔を覗き込んだ。青白い銀狐みたいな青年だ。

「何だ何だ。死んだんか。怪我けがをしたんか」

と馳はせつ付けて来た交通巡査が同時に訊いた。察するところ、運転

手の方は生きている方が好都合らしく、巡査の方はこれに反して、死んだ方が工合がいいらしい口ぶりだ。面喰らったセパードは、まだ貴婦人のお尻の処を嗅ぎまわってドツチ附かずに吠えている。

「どうしたんだ。ヘタバツたのかい」

「ナアニ。鼻ちぎが千切れたんだよ。キツト……俺あ見てたんだが」

「ベリベリツと音がしたじゃねえか。助からねえよ。急所だから

……トテモ……」

何かと云つているところを見ると野次馬の連中も巡査と同感らしい。人生貴婦人となる勿^{なか}れだ。

しかし厳正なる医師の立場に居る吾輩は、遺憾ながら運転手君に味方しなければならぬ事をこの時、既に既に自覚していた。貴婦人は最早^{もはや}、呼吸^{いき}を吹返している。ただキマリが悪いために狸の真似をしている事実を、吾輩はチャンと診断していたのだから止むを得ない。

吾輩はダカラ勿^{もつたい}体らしく咳払いを一つした。

「……エヘン……これは大丈夫助かります。大急ぎで手当をすねばね。脳^{ヒルンアネミー}貧血と、脳^{ゲヒルンエルシユテルンシ}震盪が同時に来ているだけな

んですから……」

「何かね。君は医師かね」

と新米らしい交通巡査が吾輩を見上げ見下した。吾輩は今一つ……エヘン……と大きな咳払いをした。それから悠々と長鬚を扱しごいて見せた。

「そうです。大学の基礎医学で仕事をしている者です。天狗猿……イヤ。鬼目教授に聞いて御覧になればわかります。……そんな事よりも早くこの女の手当をした方がいいでしょう。今、処方を書いて上げますから……誰か紙と鉛筆を持っておらんかね」

「ハ。……コ……ここに……」

と云ううちにドツジの運転手が、わななく手で差出した手帳の一枚を破いた吾輩は、サラサラと鉛筆を走らせた。

「早くこの薬を買って来たまえ。間に合わないと大変な事になるぞ」

「……か……かしこまり………：………ました………と云わないうちに運転手はエンジンをかけたままの運転台に飛乗った。アツという間に全速力フルスピードをかけて飛出した。

チャツカリ小僧

「……ウヌ………逃げたナ………」

と云ううちに交通巡査も、物蔭ものかげに隠しておいた自働自転車を引ずり出して飛乗った。爆音を蹴散けちらして箱自動車セダンの跡を追った。

見る見るうちに街路まちの向うの……ズウツト向うの方へ曲り曲つて見えなくなつてしまつた。

呆氣あっけに取られて見送つていた野次馬連は、そこでやつと吾に歸つたらしく、顔を見合わせてゲラゲラ笑い出した。吾輩も可笑おかしくなつたので、血を滴たらし始めている貴婦人の鼻の頭を、運転手が置いて行つた小さなノートブックの間から出て来た二三枚の名刺で押えてやりながらアハアハと笑い出した。

「奥さん奥さん。いい加減に起きて歩いたらどうです。いつまでもここに寝てたつて際限がありませんよ」

と片手で貴婦人の肩を揺り動かしてみた。

「無理だよソレア……先生。死んでんだもの……」

皆がドツと笑い出した。貴婦人の両眼から涙がニジミ流れ始めた。人生コレ以上の悲惨事は無い。自分の死骸に対して世間の同情が全く無い事を知った美人の気持はドンナであろう。どうも弱った事になって来た。そのうちにどこかの茶目らしいクリクリ頭に詰襟服の小僧が、群集の背後うしろから一枚の紙かみきれ片を拾って来て、吾輩の眼の前に突出した。

「先生。これあ今の紙じゃないですか」

「ウン吾輩が書いてやった処方だ。運転手が逃げがけに棄てて行ったものらしいな。交通巡査は流石さすがに眼が早い」

「だって先生。名刺の挟まったノートを落して行っただんじや何にもならないでしょう」

鳴りを鎮めていた群集が又笑い出した。

「ウム。豪いぞ小僧。今に名探偵になれるぞ」

「……そ……そんなんじやありません」

「そんなら済まんがお前、その薬を買って来てくれんか。そこに落ちているこの奥さんのバッグに銭が這入っているだろう」

「だって……だって。そんな事していいんですか」

「構わないとも。早く買って来い。奥さんが死んじやうぞ」

と背後の方から野次馬の一人が怒鳴った。しかし小僧はなおも躊躇した。

「ちよつと待って下さい。何と読むんですか。この最初の字は……」

……

「うん。それはトンプクと読むんだ」

「トンプク……ああわかった。頓服とんぷくか……ええと……メートル酒十銭……」

「馬鹿。メントール酒と読むんだ。早く行かんか」

「待つて下さい。薬屋で間違うといけねえから、その次は？」

「ナカナカ重役の仕込みがいいな貴様は……チャツカリしている。

それは硼酸ほうさんなんこう軟膏ばんそうこうと万創膏ばんそうこうと脱脂綿だ。薬屋に持つて行けば

わかる。早く行け、この奥さんの鼻の頭に附けるんだ」

「オヤオヤア。いけねえいけねえ。これあ駄目ですよ先生……」

「何が駄目だ」

「チャアチャア。このバッグの中には銭なんか一文も無なえや。若

い男の写真ばっかりだ。ウワア……変な写真が在ライ」

と云いも終らぬうちに塵埃ほこりだらけになって転がっていた狸婦人が鞆まりのように飛上った。茶目小僧の手から銀色のバッグを引つたくとハンカチで鼻を押えたまま一目散に電車を横切つて、向うの角のサワラ百貨店の中に走り込んで行つた。アトから犬が主人の一大事とばかり一直線に宙を飛んで行つたが、その狸婦人の足の早かつたこと……。

野次馬がドツと笑い崩れた。

「ナアンダイ。聞いてやがったのか」

「向うの店で又引つくり返りけえやしねえか」

「行つて見て来いよ。小僧。引つくり返えけつたらモウ一度バツ

グを開けてやれよ。中味をフン奪^だくつて来るんだ。ナア小僧……」

「なあんでえ。買わねえ薬が利いチャツタイ」

ワアワアゲラゲラ腹を抱えている中を、吾輩は悠々と立去った。全く助かったつもりでね。

ところが助かっ^ていなかつた。女の一念は恐ろしいもんだ。それから間もなくの事だ……。

コンクリート
混凝土令嬢

「アラツ。鬚^{ひげの}野さん……鬚野先生……センセ」

どこからか甲高い、少々媚^{なま}めかしい声が聞こえて来た。吾輩は

バツタリと立止まった。バツタリというのは月並な付け文句ではない。吾輩が立止るトタンに両脚を突込んである片チンバのゴム長靴が、実際にバツタリと音を立てたのだ。序ついでに水の沁み込んだ靴底に吸付いた吾輩の右足の裏が、ビチビチと音を立てたが、これは少々不潔だから略したに過ぎないのだ。

吾輩は空気抜の附いた流行色の古山高帽を冠かぶり直した。裸体はだか一貫の上に着た古い二重マントのボタンをかけた。

通りがかりのルンペンを呼ぶのに最初「サン」附けにして、あとから一段上の先生なんかと二ふた通りに呼分けるなんて油断のならぬ奴だ。況いわんやそれが若い、媚なまめかしい声なるに於いてをや：
…といったような第六感がピインと来たから、特別に悠々と振返

った。

それはこの町の郊外に近い、淋しい通りに在る立派なお屋敷であつた。主人はこの町の民友会の巨頭株おおあたまかぶで、市会議員のチャキチャキで、ツイ四五週間前のこと、目下百余万円を投じて建設中の、市会議事堂のコンクリートを嚙り過ぎた酬むくいで、赤い煉瓦の法律病院に入院して、新聞と検事に背中をたたかれたたかれ財産と臓腑の清算、尻拭い中である。その奥さんは、その亭主の尻拭い紙である色々な重要書類を紛失したのを苦にして、発狂して死んでしまった……と云つたら誰でも「ああ。あの混凝土野郎か」と云うであらう。

その混凝土コンクリート氏こと、山木勘九郎やまき氏邸の前を通ると、鬱蒼うっそうた

る櫛かしの木立の奥に、青空の光りを含んだ八手やつでの葉が重なり合つて覗のぞいている。その向うにゴチック式の毒々しい色硝子ガラスを嵌はめ込んだ和洋折衷の玄関が、贅沢にも真昼さなかから電燈を点つけて覗のぞいているもう一つ向うに、コンクリートの堂々たる西洋館が聳そびえているところを見ると、如何にも容易ならぬ金持らしい。ちよつと忍び込んでみたくなる位である。多分、あの櫛かしの木の闇くらがりが御自慢なのであろうが、混コンクリート凝土を喰くつた証拠に混コンクリート凝土の家を建てるのはドウカと思う。……なぞと詰まらない反感を起しながら門かどの前を通り過ぎようとしているところへ、その鬱蒼たる櫛かしの木この闇くらがりの奥から聞こえたのが今の呼声だ。

コンナ立派な家の中から、あんな綺麗な声で呼ばれるおぼえは

無い。間違ひではなかつたかなと思つているところへ、門の中から花のような綺麗な、お嬢さんの姿があらわれた。

年の頃十八九の水々しい断髪令嬢だ。黒っぽい小浜縮緬こはまちりめんの振

袖をキリキリと着込んで、金と銀の色紙と短冊の模様を刺繍したひらしや緋羅紗の帯を乳の上からボンノクボの処へコツクリと背負い上げ

て、切り立てのフェルト草履の爪先を七三に揃えている恰好は尋常の好みでない。眼鼻立めはなだちが又ステキなもので、汽船会社か、ビール会社のポスター描かきが発見したら二三遍ぐらいトンボ返りを打つだろう。

そいつがニツコリ笑うには笑つたが、よく見ると顔を真赤にして眼を潤うるませている。まさか俺に惚れたんじゃあるまいが……と

思わず自分の顔を撫でまわしてみたくらい、思いがけない美しい少女であつた。

「何だ……吾輩に用があるのか」

「……エ……あの。ちよつとお願ひしたい事が御座いますの」

と云ううちに、しなやかな身体からだをくねくねという恰好にくねらせた。しきりに顔を真赤にして自分の指をオモチャにしている。

「……ハハア。犬が欲しいんか」

まさかと思つて冷やかし半分に、そう云つてみたのであつたが、案外にもお合羽かっぱさんが、如何にも簡単にうなずいた。

「ええ……そうなんですの」

「ほオ——オ。お前が動物実験をやるチウのか」

「……アラ……そうじゃないんですの……」

「ふむ。どんな犬が欲しい」

「それが……あの。たった一匹欲しい犬があるんですの」

「ふむ。どんな種類の……」

「フォックス・テリヤなんですの。世界中に一匹しか居ない」

「ウワア。むずかしい注文じゃないか」

「ええ。ですからお願いするんですの」

「ふうん。どういうわけで、そんなむずかしい仕事を吾輩に……」

「それにはあの……ちよつとコミ入った事情がありますの。ちよつとコチラへお這^{はい}入りになって……」

と云ううちにイヨイヨ真赤になった。今度は平仮名の「く」の

字から「し」の字に変わった。打棄うっちゃつておくと伊呂波いろは四十八文字を、みんな書きそうな形勢になつて来たのには、持つて生れたブツキラ棒の吾輩も負けちやつたね。今に「へ」の字だの、「ゑ」の字だのを道みち傍ばたで書かれちや大變だと思つたから、悠々と帽子を取つて一つ点頭うなずいてみせると、お合羽さんは振袖を翻えして門の内へ走り込んだ。お尻の上の帯をゆすぶりゆすぶり玄関ドアの扉を開いて、新派悲劇みたいな姿態ポーズを作つて案内したから吾輩も堂々と玄関のマットの上に片かた跛びっこの護謨靴ゴムを脱いで、古山高帽を帽子掛にかけた。お合羽さんが自分の草履と、吾輩の靴を大急ぎで下駄箱に仕舞うのを尻目に見ながら堂々と応接間に這入つた。

「失礼じゃがマントは脱がんで。下は裸一貫じゃから」

「ええ。どうぞ……」

廃物豪華版

応接間の構造は流石さすがに当市でも一流どころだけあって実に見事なものであつた。天井裏から下つた銀と硝子ガラスの森林みたような花電燈。それから黒虎斑ぶちの這入つた石造の大煖炉だんろ。理髪屋式の大鏡。それに向い合つた英国風の風景画。錦手にしきでおおどんぶり大井いと能面を並べた壁飾かべかざり。その下のグラランド・ピアノ。刺繍の盛上つた机掛。黄金の煙草容器。銀づくめの湯の音をジャンジャン立てているサモワルに到るまで、よくもコンナに余計な品物ばかり拾い集めた

ものである。乞食の物置小屋じゃあるまいし……とすっかり軽蔑してしまつたが……もつとも余計な品物を持つている点に於ては吾輩も負けなかつもりだ。冠つてゐる山高から、ボロ二重マント、穿いてゐる長靴は勿論の事、その中に包まれてゐる吾輩、鬚野房吉博士の剥身むきみに到るまで一切合財が天下の廢物ならざるはなし。

コンナ豪華な応接間の緞子どんすと真綿まわたで固めた安樂椅子の中に坐らせるのは勿体ないみたいなもんだが、しかし、その贅沢品の豪華版の中から生まれ出たような断髪の振袖令嬢が、その廢物づくめのルンペンおやじに、大切な用があると仰おっしゃ言いるんだから世の中は不思議なもんだ。一つ御免蒙おみこしつて御神輿おろを卸おろしてみよう。そうして銀のケースの中から葉ハヴァナ巻マキを一本頂戴してみよう。

断髪令嬢が素早く卓上のライターを取上げて器用に火をつけてくれた。その物腰をみるとチョット珈琲店カフエーの女給さんみたいな気がして、手が握りたくなつたが止した。

それから断髪令嬢は卓上のサモワルから馴れた手附で珈琲コーヒーを入れて、吾輩にすすめてくれたが、その容器を見ると、ここが断然カフェーでない事を覚らせられた。そこいらにザラにある珈琲茶碗じゃない。舶来最極上の骨灰焼だ。底を覗いてみると孔雀型の刻印があるからには勿体なくもイギリスの古渡りこわたじゃないか。一つ取落しても安月給取の身代ぐらいはワケなく潰れるつぶシロモノだ。吾輩はルンペンではあるが、有閑未亡人の侍ハンドバツグ従をやつていたお蔭でソレ位のこととはわかる。亜米利加アメリカの名探偵フィロ・ヴ

アンスみたいな半可通はんかつうとはシキが違うんだ。

「……わたくし……父が御承知の通りの身の上で御座いまして……わたくし迄も世間から見棄てられておりまして……おすが継りして御相談相手になつて下さるお方が一人も御座いませんの」

「フムフム……尤ももつとじや」

「みんな世間の誤解だから、心配する事はないと、父は申しておりますけど……」

吾輩は鷹揚おうようにうなずいて見せた。誤解にも色々ある。とんでもない売国奴が、無二の忠臣と誤解されている事もある。純忠、純誠の士が非国民と間違えられる事もある。警察に引っぱられたカフエーの女給が、華族の令嬢に見られる事もある。いい加減

な派出婦が万引したお蔭で、貴婦人と間違えられる事もある世の中だ。吾輩なんかは乞食以下の搔攫かつさらいルンペンと誤解されてい
る世界的偉人だ……と云ってやりたかったが、折角、花のような
姿をして葉卷ハヴァナや珈琲を御馳走してくれるものを泣かしても仕様
がないと思つて黙つていた。

「世間ではナカナカそう思つてくれないので御座いますの」

吾輩は今一つうなずいた。そう云う令嬢の眼付を見ると、どう
やら父親の無罪を確信しているらしい態度ようすである。吾輩はグツと
一つ唾液つばを嚥のみ込んだ。

「いったいお前の父親は、ほんとうに市会議事堂のコンクリート
を嚙かじつたんか」

「いいえ。断然そんな事、御座いません。この家を建てた請負師うちの人が、偶然にかどうか存じませんが、市会議事堂を建てた人と同じ人だったもんですから、そんな誤解が起つたんです。ですからわたし、口惜しくつて……」

「成る程。そんならお前の父親が、この家の建築費用をチャント請負師に払うた証拠があるんかね」

「ええ。御座いましたの。そのほかこの応接間の品物なんかを買い集めた支払いの受取証などを、みんな母が身に着けて持つていたので御座いますが、それがどこかで盗まれてしまいました、その受取証や何かみんな反対党の人達の手に渡つたらしいんですの。ですから反対党の人達は大喜びで、そんな受取証を握り潰し

ておいて、父がそんなものを賄賂わいろに貰ったように検事局に投書したらしゆう御座いますの。ですから検事局でも、その受取証を出せ出せて責められたそうですけど、父はその事に就いて一言も返事をしなかつたもんですから、とうとう罪に落ちてしまいました」

「成る程、わかつた。墮落した政党屋の遣りそんな事だ」

「父は、それですから、母にその証文を入れたバッグを出せ出せて申しますけども、どうしても母が出さなかつたので御座います」

「成る程。それは又おかしいな」

「ええ。でもおしまいには、とうとう母が白状致しましたわ。亡

くなります。二三日前の晩に、すこし気が落ち附きますと、それまで肌を離さずに持っていたバッグを父に渡しました。けれども中味は空っぽで御座いました。その時から一週間ばかり前にどこかで自動車に突飛ばされて倒れた拍子に、そのバッグの中味を誰かに見られて奪られてしまったらしいんです。……その人が反対党の手先か何かだったに違いない。母は申ししておりますが……ほんとに申訳ない、口惜しい口惜しいって申しましたが……」

そう云って吾輩を見上げた令嬢の眼に一点の露が光った。ナカナカ親孝行な娘だ。今度は抱上げて頭を撫でてやりたくなった。「そこでアンタはそのお父さんに対する世間の誤解を晴らそうと

思っているわけじゃね」

「そうなんですの……駄目でしようかしら……」

なかなか大胆な娘らしい。決心の色を眉宇びうに漲みなぎらしている。

犬のダニ

「さあ。ちよつとむずかしいなあ。世間の誤解という奴は犬のダニみたいなものじゃから……」

「まあ……犬のダニ……」

「そうじゃ。犬のダニみたいに、勝手に無精生殖をしてグングン拡がって行くもんじゃからね。皮膚の下に喰込んで行くのじゃか

ら一々針で掘った位じゃ間に合わんよ。ウツカリ手を出すとこつちの手にダニがたかつて来る」

「まったくですわねえ」

「ジャガ芋の茹^ゆで汁で洗うと一ペンに落ちるもんじゃが」

「まあ。ジャガ芋をどう致しますの」

「アハハ。それは犬のダニの話じゃ。鉄筋コンクリートなんぞに喰い込んだダニなんちいうものはナカナカ頑強で落ちるもんじゃやない。七十五日ぐらいジツと辛抱しているとダニの方がクタバビレて落ちてしまう事もあるが……」

「それがその七十五日なんか待ち切れないので御座いますの。その中^{うち}でも或るタツタ一人の方の誤解だけは是非とも解いてしま

ませんと、わたくしの立場が無くなるんですの。……でも……それがタツタ一匹の犬から起った事なのですから……スツ……スツ……」

令嬢の眼からポロリポロリと光る水玉が^{すべ}沁り落ち初めた。

どうも考えてみると変った娘があればあるものだ。通りがかりのルンペン親爺を^{おやし}応接間に引っぱり込んで最極上の葉卷と珈琲^{ハヴァナ コーヒー}を御馳走して、^{いのち}生命よりも大切な涙をポロポロ落して見せるなんて、^{はず}だいぶ常識を外れている。ことによるとこの少女はキチガイの一種である早発性痴呆かも知れないと思った。

「ハハア。面白いワケじやな……一匹の犬に關係している。タツタ一人の誤解が……」

「そうなんですの……そのタツタ一人の方に誤解される位なら妾死んだ方がいいわ……スツ……スツ……スツ……」

「ちよつと待つてくれい。もうすこし落付いてユツクリ事情を話してみなさい」

お惚^{のろけ}気豪華版

それから断髪令嬢がシャクリ上げシャクリ上げ話すところを聞いていたうちに、やつと事情^{わけ}が判明^{わか}つて来た。この断髪令嬢は本名を山木テル子さんという山木氏の一人娘で、エース女学校を去年卒業したばかりの才媛である。二年^{ぜん}前に前外務大臣^{おしがわ}唾川伯爵

の令息で、唾川歌夫うたおという外務省情報部勤務の青年と婚約が出来ているのが、父親山木混凝コンクリート土氏の疑獄事件で、そのままになつているといふ。

ところで、その唾川歌夫という青年外交官は、嘗てかつその婚約時代に和蘭オランダ、独逸ドイツ、瑞西スイスを遊学してまわつた事があるが、その帰朝土産に仏蘭西フランスは巴里パリの犬の展覧会から、何万法フランか出して買つて来た世界第一、無類飛切とびきりというフォックス・テリヤのお手本みたような仔犬を一匹持つて来て令嬢に与えた。

「式を挙げるまで、これを僕と思つて可愛がつて下さい」

という婚約者のお手本みたいな甘つたるい文句付きであつたが、その犬の特徴というのは、ピアノを弾き初めると妙に眼を白くし

て天井を見てアクビみたいな声を出して、アウーアウーと合唱する。そのほかABCのカード拾いだの、十以下の計算の答えをカードで出したりするので、令嬢はそれこそ有頂天になって、名前をUウーTターAと名付けて、手の中の玉みたいに可愛がって夜は一緒に抱いて寝る。眼が醒めると、

「サア。ウーちゃん御飯をお上り」

と頭を撫でてやる。お客様が来ると直ぐに連れて来て芸当をやらせる。お客様が感心すると抱き寄せて頬ずりをしてやる。

「ねえ、随分伶俐りこうでしょ。これ唾川小伯爵から頂いたのですよ。

ねえねえウーちゃん。アラアラ眼脂めやにが出ているわよ」

なんかと云って嘗なめてやらんばかりにして見せるので大抵のお

客が驚いて帰ってしまう。夜となく昼となく甘ったるい言葉ばかりかけるので実の両親までもが、朝から晩までエヘンエヘンと云っていたという。

ところが、その父親に対する妙な風評が、次第に高まって来て、門の表札が引つpegがされたり、二階の硝子窓から石が飛込んで来たりし始めると間もなく、突然にそのUTA君が行方を晦くらました。むろん逃げたものだから殺されたものだから見当が附かない。門の外に出さないのだからといって鑑札を受けていなかったのが、運の尽きであったのかも知れない。

テル子さんはキチガイみたいになった。むろん警察に頼んだ。私立探偵も雇った。自分でも男装して父親のパスカードのオーブ

ンを運転しながら、市中を駈けまわって探したものであるが、そのうちに世間の父親に対する憎しみがだんだん高まって来ると、とうとうそのパツカードにまで石を投げる奴が出て来た。しまいには壮士みたいな奴が五六人、大手を拵げて行手に立塞たちふさがったりするようになったので、流石さすがの断髪、男装令嬢も門外へ一步も出られなくなってしまう。おまけに「非国民の断髪令嬢、大威張りでパツカードを乗廻す」という新聞記事で止刺刃とどめを刺されてしまった。

ところが間もなく更に、それ以上の打撃がテル子嬢の上に落ちかかった。

その頃既に父親の山木コンクリート氏は、世間の風評に対して

極度の神経過敏症に陥っていたらしい。そのUTAウーターが居なくなつたのは婚約者の唾川小伯爵がコツソリ盗み出したものに違いないと云い出した。俺みたいな奴の娘を名門の息子が貰う訳に行かないといつので、父親の唾川前外相の指令か何かを受けた小伯爵が、人を頼んでか、又は自分自身でか盗み出したものだ。今の華族なんて奴は妙に家柄や何かを振ふりまわすが、その振まわす根性といつたら実に軽薄なものなんだ。よしんば親は泥棒にしても子供同士は清浄無垢なものなんだ。況いわんや俺の心境は明鏡止水、明月天に在り、水甕みずがめに在りだ。そんな軽薄な奴の息子にかけ換えのないお前を遣る訳に行かん。

あの医学士の羽振菊蔵はぶりきくぞうを見よ。彼奴あいつの親爺おやじの羽振菊佐衛門きくざえもんは

貴族院議員のパリパリで、日支銀行の頭取という財界の大立物なんだが、そんな名門面づらを一度もして見せた事がないばかりでない。俺に対する世間の疑惑が高まれば高まるほど熱心に俺の世話をしているだろう。毎日のように俺に秘密の電話をかけて俺を慰めていたではないか。その倅せがれの菊蔵でも同じ事。親の光りで暇潰しの外交官なんかやっている青二才とは育ちが違う。俺の悪評が高くなつたこの頃になつて平気でお前に婚約を申込んで来るところを見ると相当の苦勞人だ。あの男は目下大学で博士号を取る準備をしているそうだから。近いうちに博士になるだろう。博士になつたら、お前の婿むことして恥かしくないのみならず、彼の精神が実に見上げたものだ。

第一唾川歌夫という奴は、外交官の癖に、親譲りの無口でブツキラボーで、刑事みたいな凄い眼付きをしているから、到底外交官なんかに向かない事が、わかり切っている。これに反して羽振菊蔵の方は弁舌が爽かで、男ぶりがよくて世間の常識に富んでいるから、俺みたいな年寄と話してもチツトモ退屈させないから感心してしまう。だからお前も、いい加減に諦めて、羽振の方に婚約を切りかえろ、俺は一生懸命で、お前のためばかり思っているんだぞ……とか何とかいったような訳で、コシクリート混凝土氏は或る夕方のこと、涙を流さむばかりにしてテル子嬢の手を握っているうちに、突然に検事局に引っぱられて、そのまま未決へ放り込まれてしまった。そのアトは父の気に入りの津つがねかつへい金勝平という執事みた

いな禿頭の老人と、親よりも誰よりも八釜やかましい古参の家政婦で、
八木節世やぎせつよという中婆さんが、家中うちの事を切まわしているので、テ
ル子嬢は全然手も足も出なくなっているという。

「唾川歌夫さんは、それつきりお手紙を一本も下さらず、お電話
もおかけになりません。おかけになっているかも知れませんが、
電話はイツモ家政婦の八木さんか、津金爺さんが聞いてしまつて、
私には知らせませんし、お手紙だつて私が見る前に二人して隠し
ているらしい様子ですから……あたし……情なくて……悲しくて
……スツ……スツ……」

吾輩はそういう令嬢の泣声を聞きながら茫然として相手のお合か
つぽつぽ羽頭を眺めていた。

「フーン。で、その犬がアンタの手に帰ったらアンタはどうするつもりかね。参考のために聞いておきたいのじゃが」

「だって、そうじゃ御座いません？ その犬が居ないと歌夫さんに、直ぐ来て下さいってお手紙が上げられないじゃ御座いませんか。いつでも速達を上げると直ぐに飛んで来て下さったんですからね。そうしてお出いでになると直ぐに犬の事をお尋ねになるんですからね」

ルンペン道

「イヤ。わかったわかった。よくわかった。なかなか困難な註文

のようじゃが、やってみるかな一ツ……」

「あら……どうぞお願いしますわ」

テル子嬢が立上った。振袖を床の上に引ひきずつてお辞儀をした。吾輩もやおら立上った。

「……しかし……もう一つお尋ねしておきたいことがあるがな」

「ハイ。何なりと……」

「そのアンタの母さんが自動車でお怪我けがをしなされた時の模様が、聞いておきたいのじゃが」

「それが、よくわからないので御座います。母はただ口惜しい口惜しいと申しましてキチガイのように泣いてばかりおりました……母は元来、非道ひどいヒステリーで御座いまして、お医者様から外

出を停められていたので御座いますが、ちようど一月ばかり前のこと、あんまり屋内うちにばかり引つ込んではいけなからと申しまして、セパードを連れて散歩に出かけますと間もなく、顔のマン中へ脱脂綿と油紙を山のように貼り付けて帰って参りましたのでビックリ致しました。何でもゴーストツプあが開いたので、犬を引いたまま横断歩道に出ようとすると、横合いから待ち構えていたらしい箱自動車が出て来て妾わたしを突飛ばした。その自動車の中から髯だらけの怖い顔をした紳士が降りて来て、気味の悪い顔でニタニタ笑いながら、私を診察しいしい、まわりを取巻いている見物人をワイワイ笑わせていた。その隙すきに、その紳士が、妾のハンド・バッグの中味あたらたを検めて大切な書類さらを攫って行ったものらし

い。あの髯だらけのルンペンみたいな紳士が、きつと反対党の廻し者か何かだったに違いない。口惜しい口惜しいと云つて寢床の中で身もだえをしておりますうちに、非道い発作が起りまして、『妾はコンナ非道い侮辱を受けた事はない。仇を取つて来るから』と云つて駈け出しそうになりますので皆して押え付けようとしたが、どうしても静まりません。却つて非道くなつてしまつて、弓のようにそり反りますので、そのまま神田の脳病院に入れて、寢台へ革のバンドで縛付けておきますと、その革のバンドを抜くようとして藻搔いた揚句、どこかへ内出血を起して、その自家中毒とかで突然に……亡くなりました……」

「成る程。どうもエライ騒ぎじやつたな。不幸ばかり重なつて……」

…」

「……ですから一層のこと歌夫さんがお懐かしくて仕様が御座い
ませんの。コンナ時にこそ居て下さると、どんなにか力になるで
しようと思いなながら、それも出来ませんし」

「イヤ。わかったわかった。よくわかった。とにかく吾輩が引受
けた。直ぐに今から活動を開始するじゃ。それではこれで帰ろう
……いや構わんでくれ。左様なら……」

吾輩は一人で喋舌しゃべりながら慌てて帽子を冠つて、長靴はを穿いて
玄関を飛出した。往来に出て真青な空を仰ぐとホツとした。「ア
ハハハハ……」と思わず一人で高笑いした。冗談じゃない、テル
子嬢の母親を殺し、父親を未決監にブチ込んだ人間は誰でもない、

この吾輩という事になつてゐるらしい。直接に殺さなくとも責任は十分こつちにあるらしい。母親の云う事はテンヤワンのゴチャゴチャだらけであるが、それでも吾輩の笑い顔だけはハッキリと記憶に残して死んでゐるらしいのだから頗るすこぶ氣味が悪い。しかも女というものは、思い違いでも何でも構わない、一度そんな風に思い込んでしまうと、アトでいくら間違つてゐることが判明わかつても決して素直に承認する動物でない。女に思い込まれたのと、暴力団に附け狙われたのと、新聞に書かれたのと、スッポンに喰い付かれたのとは、如何なる場合でも運の尽きである。ありもしない事を勝手に口惜しがつて死んだ場合でも、遠慮なく閻魔大王えんまから幽霊の鑑札を受けて娑婆しゃばに引返して来る位の決心を、女とい

うものはフンダンに持っているのだから厄介だ。

のみならず何を隠そう、一個月ばかり前にテル子嬢の大事なフ
オックス・テリヤを盗んで大学の博士の卵に売付けたのは、誰あ
ろう、この吾輩なのだ。家人の隙を窺ったものである。チヨコ
チヨコと門の中から出て来て吾輩に向つて尻尾しっぽを振っている可愛
らしいテリアに鑑札のないのを見て……この野郎、これくらい立
派な家で鑑札を受けていないナンテ手はない、怪けしからん野郎だ、
引さらつ攫さらつてやれ……といったような気持でポケットに入れたのが
吾輩の運の尽きであつた。そのテリアあつた一匹のために、お人
形さんみたいな快活、明敏な令嬢が、破鏡の悲劇に陥ろうとして
いる。冗談じゃない。この責任が負わずにおられるもんか。

他人にわかりさえしなければ、どんな事をしてもいいというのが現代の上流社会の紳士道らしいが、吾々の所謂いわゆるルンペン道ではそうは行かん。五千円のダイヤでも無代ただでは貰わない。チャンと二銭払うのが屑屋の仁義になつてゐるじゃないか。

UウTーAタヤアイ

世の中に行きがかりぐらい恐ろしいものはない……と吾輩は賑やかな電車通りに出て考えた。井伊の掃部かもん様は桜田門なんか通らなかつたら首無し大名なんかにならないで済んだであらうし、キリストやクレオパトラだつて今の世に生まれていたらハリウッド 林 あ

たりのステージで抱合つて、監督をハラハラさしているかも知れない。俺だつて十四の年に女郎買いに行つたのが振り出しで、いつの間にかコンナいぬさらい犬攫いぬさらいのルンペンに……まあそんな事はドウでもいい。とにかく偶然ぐらい恐ろしいものは世の中にない。

ところで問題は眼の前の仕事だ。……出来るだけ美味い酒うまが飲めるような結論の方向へひっぱって行きたいものだが……差当つて先ず、何といつても問題のフォックス・テリヤウーダUTAウーダを探し出すのが目下の急務だろう。

ところで面白い事に吾輩はそのテリアウーダUTAウーダを売付けた相手の顔をチャンと記憶しているんだ。誰でもない、大学の耳鼻科の教室で研究している羽振菊蔵という医学士だ。今の令嬢の話に出て

来た通りの、いやにノツペリしたきざ気障な野郎だが、そいつの手に
UウTーAタが渡っているんだからくど冗いようだが偶然は恐ろしい。むろ
ん羽振医学士は、そんな事とは夢にも知らない筈だし……イヤ、
知っているかも知れないが、知っておれば尚更のこと、もうトツ
クの昔に実験にかけて殺してしまっているかも知れない。

吾輩は思わず急ぎ足になった。タクシー代は勿論、電車賃もな
い、昨夜飲ゆんべんでしまったんだから……。

喜劇？ 悲劇？

実にいい天気だった。

いい天気だと往来を歩いている犬が多いもんだ。そいつを五六匹も攫さらつて大学へ持つて行けば八両や十両の仕事には直ぐになる。行きつけの居酒屋「樽たるま万」で銘酒「邯鄲かんたん」の生き一本がキューと行ける筈なのに、要らざる処を通りかかって要らざる用事を引受けた御蔭おかげで、千里一飛ひととび、虎小走り一直線に大学へ行かねばならぬ。

断髪令嬢が、婚約中の愛人から貰った小犬を、そんな事とは知らない吾輩が攫さらつて大学校の博士の卵に売飛ばしたバツカりに、その断髪令嬢に対して重大な責任が出来てしまった。その小犬を取返して、断髪令嬢の破れかけたハートを修繕しなければならぬ責任を、否いやおう応おうなしに負わされてしまった。しかもその大切な小

犬を実験用に買った奴が、その令嬢の愛人の恋こいがたき 仇と来ているんだから話がヤヤコシイ。首尾よく犬が取返せるか、返せないか。この恋が成立するかしないかという重大な責任が、千番に一番の兼ね合いで、吾輩の双肩にかかって来た訳だ。

棒も歩けば犬に当るとはこの事だ。

考えてみると馬鹿馬鹿しい話だ。そんな責任をイケ洒しゃあ洒しゃあと吾輩に負わした彼かの断髪令嬢は二三時間前まで、全く見ず識らずの赤の他人だったのだ。ドコの馬の骨だか牛の骨だか、訳のわからない同士だったのだ。人間、返す返すも行きがかりぐらい恐ろしいものは無い。

探偵小説では偶然の出来事を書く面白くないというのがこれは

恋愛物語なんだから構わないだろう。しかも喜劇になるか、悲劇になるかは一に吾輩の手腕一つにかかっているんだから、何の事はない、実物応用の実際小説だ。世界歴史と同様今にドンナ事が始まるかわからない。舞台監督兼主役の吾輩からして一寸先は真ま暗闇つくらやみだ。

先ず断髪令嬢山木テル子の愛人、唾川歌夫の恋敵、羽振キク蔵君にブツカル訳だが、サテ、どんな機嫌きげんさま様にぶら下るか……。

半死の小犬

サア来た。大学医学部の実験動物飼育室に来た。イヤ、どうも

暑い何のつて……二重マントの袖で汗を拭い拭いしてみたが明るい外界からイキナリ、暗い飼育室に来たもんだから梟ふくろみたいにも見えない。何ともいえない劇毒薬の蒸発するような動物臭が腸はらわたのドン底まで沁しみ込んで行く。世界の終りかと思えるようなエタイのわからない悲鳴が、あとからあとから耳の穴に渦巻き込む。勿体なくも市内第一流の桃色ローマンズの糸の切端きれはしがコンナ処に落込んでいようなんて誰が想像し得よう。先まず一息入れて落付いてみる事だ。

居る居る。猫だの犬だのモルモットだのがウジャウジャ居る。

雛ひよツ子を育てるような金網の籠に犬は犬、猫は猫と二三匹か四五匹宛ずつ入れた奴がズーツと奥の方まで並んでいる。鶏にわとりも居るし小羊

も居る。奥の方から羽二重はぶたえを引裂くような声が聞こえる処を見ると、猿を飼っている贅沢な奴が居るらしい。まさか青二才の博士の卵が、猿の糞丸きんたまを使って若返り法を研究しているのじやあるまい。

そんな動物連中の排泄物や、体臭や、猛烈に腐敗した食餌の落おちこぼれちこぼの発酵瓦斯がすで、気が遠くなるほど臭い上に、ギヤアギヤアワンワンニヤーニヤーガンガン八釜やかましい事夥おびただしい。その中でも犬の鳴声が圧倒的に大多数なのは吾輩の努力あずかが与って力がある訳で、心強いことこの上なしだ。その金網籠の一つ一つに、それぞれ所も有主ちぬしの木札が附いている奴へ、番人が、それぞれに餌えを遣っている。この番人が犬や猫へ遣る御馳走をチヨイチヨイつま抓つかんでいる事

実を知っているのは吾輩だけかも知れないが、しかし又、こいつが居ないと、博士の卵連中が、研究室とかけ持ちで動物の世話をしなくちやならないのだから文句は云えない。吾輩みたいに無代価で攫さらつて来たシロモノを売りつける癖の附いた人間から見れば、この金網の番人などは、よつほど尊敬していい訳だ。だから吾輩はいつでも出会うたんびに山高帽をチョツと傾けて敬意を表する事になっている。上には上があると思つてね。

ところでその金網籠に附けた木札を覗きまわつてみると在った。ハブリと片仮名で書いた木札を附けた犬の籠が片隅に十ばかり固まっている。どうも恐ろしく犬ばかり集めたもんだと思つたが、よく見るとドレモコレモ見覚えのある犬ばかりだ。果然、

羽振医学士閣下は吾輩の^{じょうとく}上華客だつた事を思い出した。ブルテリヤ、^{ちん}狢、セツター、エアデル、柴犬など。飼犬の豪華版みたいだが心配する事はない。どれもこれも純粹種なんか一匹も居ないのだからヤヤコシイ。いい加減というよりも寧ろ^{むし}ミジメな位の混合種ばかりが、尻尾振り合うも他生の縁という訳でギャンギャンキヤンキヤン吠え合つていたものだが、そいつが吾輩の顔を見ると一斉に吠えるのを止めて、尻尾を振り振り金網に立ちかかつて来た。

吾輩は胸が一パイになつた。タツタ二時間、三時間のおなじみでもチャント記憶しているから感心なものだ。勿論、吾輩の顔や風態を見覚えてはいる訳ではなからう。亞^{アレキサンデル}歴山大王は身体に蓄^ば

薇^らの臭いがしたという位で、吾輩みたいな偉人の体臭は、犬にとつても忘れられないものがあると見える。

その中にタツタ一匹、歓迎の意を表しない奴が居る。隅っ子の特別の金網に入れられて息も絶え絶えに屁^へ古^こ垂^たれている汚ならしいフオックス・テリヤだ。見忘れもしないこの間、山木^{コンクリート}混凝土氏の玄関前から搔^かつ攫^{さら}った一件だ。

色男医学士

吾輩はツカツカとその金網に近づいてブルブル震えている犬^{やつ}を抱き上げた。犬さえ見付かれや他に用は無。持って帰って山木

テル子嬢に引渡せばいい……と思つて抱き直すトタン犬の肋骨が
ゾロツと手に触つたのでゾツとしてしまった。見るとアンマリ弱
り方が甚しい。骨と皮ばかりになつてゐる上に、鼻の頭がカラカ
ラに乾いてしまつて、瞳孔の開いた眼脂だらけの眼で悲しそうに
吾輩を見上げてゐるが尻尾を振る元氣も無いらしい。一体これは
どうした事かと、明るい窓の下へ持つて行つてよく見ると、弱つ
てゐる筈だ。咽喉のどを切り開いて金属製の鶴ひよぶえ笛みたいなものを嵌は
め込まれてゐる。その小さいブリキ板の中央の穴からスウスウと
呼吸をしているのが如何にも苦しそうだ。よくジフテリヤに罹かかつ
た子供が、咽喉が腫はれ塞ふさがつて咽喉切開の手術をされたあとに嵌
めてもらつてゐるアレだ。こうした鍼はり力製の呼吸孔の事を医学用

語ではカニウレと云うのだが、和訳したら金属製咽喉笛とでもなるのかな。

さてはこのフォックス・テリヤ氏、UTA君はジフテリヤにでも罹^{かか}ったのかな。そうとすればこの容態ではトテモ助からない。おまけに熱も相当に在るようだが……弱ったな。黙って持つて行くつもりだったが、コンナ容態では持つて帰るうちにグウタになつちまうかも知れない。ハテ、何とか方法は無いものか……と、ガタガタ震えている犬を抱えてシキリに考えているところへ、背後から音もなく猫のように忍び寄つて来て、吾輩の肩にソツト手を置いた奴が居る。振返つてみると、タツタ今考えていた当の本人の羽振医学士だ。悪いところへ来やがったと思つたが、しかし

何度会つてもいい男だ。毛唐けとうで破廉恥脳バレンチノという女たらしの映画俳優が居たがソイツによく肖にている。頭をテカテカに分けて白い診察服を着込んでいる恰好はモウ立派な博士様だ。

「……今日は……鬚野先生。いい犬が見付かりましたかね」

「イヤ、今日は駄目だ。それよりもこの犬はドウしたんかい。ジフテリヤでもやったんかい」

「アツ、この犬ですか」

「知つとるのかい、この犬を……」

「存じております。一ヶ月ばかり前に頂戴しましたフォックス・テリヤで……」

「そうじゃない。この犬がどこの家の犬だか知つとるのかと云う

「んだよ……君が……」

「……………」

羽振医学士の顔がサツト青くなつた。どうやら知っているらしい眼の玉の動かし方だ。

「知らん筈はないじやろう。あの家の犬うちということを」

「存じません。ドコの犬だか……貴方がどこかからかお持ちになつたのですから……」

「この犬は山木テル子さんの犬だよ」

「へエ、山木テル子さん……存じませんな、ソナナ方……」

「ナニ知らん……」

「ハイ、まったく……その……」

「ウン、キット知らんか……」

「……ぞ……ぞんじません。そんな方……まったく……」

博士の卵が汽車の信号みたいに青くなったり赤くなったりした。しかし汽車の信号でも何でもモウ相場がきまっている。自分が結婚を申込んだ女の名前を忘れるようなウンテレガンが在るもんじやない。コイツは多分、この犬の名前がウータといて、自分の恋こいがたき敵、唾川歌夫からテル子嬢に贈ったものである事もチャンと知っていやがるに違いない。そいつを承知でコンナ非道ひどい眼に合わせて、いい気持になつてゐる事が吾輩にわかつたら事が面倒だと思つて、障さわらぬキチガイ崇たりなし式に、最初から警戒しいしい口を利いてゐるのだらう。コンナ誠意のない奴にあの親孝行無

双の断髪令嬢を遣る訳には断然イカン。

「フン、知らんなら知らんでええ。その代りにこの犬の病氣を出
来るだけ早く治癒せ^{なお}」

「アツ。そ……そいつはドウモ……」

「出来んと云うのか」

吾輩の見幕を見た羽振医学士がブルブル震え出した。すこしずつ
後退^{あとしざ}りを始めた。

「ハ……ハイ。それはソノ……結核の第三期にかかっております
ので……ハイ……」

「変な事を云うな。最初から第三期か」

「イエ。その最初が初期で……その次が第二期で……」

「当り前の事を云うな。籠^{べらぼう}棒めえ。最初から結核だったのか、この犬は」

「ソ……それがソノ……実験なんで……」

「何の実験だ……」

「それがソノ……今までジフテリヤにかかつて手遅れになりますと、咽喉切開をして、その切開した部分へコンナ風にカニウレを嵌めます。ところがそのカニウレの穴から呼吸をすると色々な呼吸器病にかかる事がありますので……」

アンマリ真面目腐^{ざわら}つて講釈をするもんだから吾輩はちよつと嘲^あ笑^{ざわら}つてみたくなつた。

惜しい鼻柱

「フウム。このカニウレを嵌めた奴は人間でも犬猫でもこの通りチヨツト高襟はいからに見えるから、一つ流行はやらしてやろうかと思つていたところじゃが、そんなに有害なものかのう」

「人間の鼻というものは実に都合よく出来ておりますもので……」
「当り前だ。バレンチノだつて鼻で持つているんだ。羽振先生だつてそうだろう」

羽振先生、思わず自分の鼻を撫でた。聊かバレンチノを自覚している見える。

「その……当り前でして……鼻の穴の一番前に鼻毛がありました、

その奥に粘膜があります。それから咽喉を通つて空気を吸込みますので、その間に色々な黴菌ばいきんや、塵埃ほこりが、鼻毛や粘膜に引っかけて空気がキレイになります上に、適当な温度と湿気を含んで、弱い、過敏な咽喉を害しないように出来ておりますので……」

「ウン。成る程のう……ところで加賀の国の何代目かの殿様は、家老や奥女中から笑われるのも構わずに鼻毛を一寸以上伸ばして御座つたという話だが、アレは君が教えたのか」

バレンチノが長い、ふるえたタメ息をした。

「へエ。存じませんが……そんな方……」

「よく知らん知らんと云うのう。それじゃ鼻毛のよく伸びる奴は、大てい女好きで長生きをするものだが……俺なんかは無論、例外

だが……アレはやっぱりホルモンの関係じゃないのか」

「サア、わかりませんが。研究中ですから……」

「そんな研究ではアカンぞ」

「へエ、相済みません」

「俺に謝罪あやまったって始まらないが……それからドウしたんだ今の話

は……」

「へエ、何のお話で……」

「アタマが悪いのう君は……イクラか蓄膿症の気味があるんじゃないか君は……それともアデノイドか……」

「そんな事は絶対に御座いません」

「成る程、君はその方の専門だったね、失敬失敬。今の鼻毛の話

よ。鼻毛は健康の礎……ホルモンのメートルだという……」

「へエ、そうなんで……ところがその咽喉に有害な黴菌や塵埃を含んだ乾燥したつめたい空気をこのカニウレから直接に吸込みますと、直ぐに咽喉を害しますので、そこへ色々な黴菌がクツ付いて病気を起します。この犬なども御覧の通り切開手術をしてやりますと間もなく結核を感染しまして……」

「成る程。それが実験なのか」

「左様さようで。切開手術の練習にもなります」

「フン。余計なオセツカイづくめだな。君の実験は……」

「どうも相済みません」

「よくあやまるんだな君は……ところでこの犬結核はドウなるん

だ」

「ハイ。いよいよカニウレが有害な事がわかれば、その次には羽振式のカニウレを作りまして、決してソナ心配のないように致しますので……」

羽振学士の顔色が、ダンダンよくなってきた。

「ふうむ。ソレ位の事で博士になれるのか」

「なれる……だろうと思いますので……」

「うむ。マアなるつもりでセイゼイ鼻毛を伸ばすがいい。ところで改めて相談するが、この犬の結核を何とかして治癒なおす訳には行かないのか」

「さあ。コイツは一寸ちよつとなおりかねます」

「博士になれる位なら、犬の結核ぐらいは何でもなく治癒せるじやろう」

「ハハハ。なんぼ博士になりましたも、コンナ重態の奴はドウモ……」

「モトモト君が結核にしたんじゃないか……この犬は……」

「……そ……それはそうですけれども、治癒すとなりますとドウモ……」

「ふうむ。そんなら君は病気にかける方の博士で、治癒す方の博士じゃないんだな」

「……そ……そんな乱暴なことを……モトモト実験用に買った犬ですから僕の勝手に……」

「……黙れ……」

「……………」

「いいか。耳の穴をほじくつてよく聞けよ。貴様は空そらとぼ呆けているようだが、貴様がこの頃、婚約を申込んでいる山木のテル子嬢はなあ、この犬を洋行土産に呉れた唾川歌夫……知っているだろう、貴様の恋敵に対して済まないと云つて、泣きの涙で日を暮らしているんだぞ。その犬が自宅うちに居ないと歌夫さんに来てもらえないと云つて瘡やせる程苦労しているんだぞ。その真情に対しても貴様はこの犬を全快させる義務があるんじゃないか。貴様は貴様の愛する女の犬を結核かかに罹かからせてコンナに骨と皮ばかりに瘡せ衰えさせるのが気持がいいのか。それともこの犬が偶然に手に入つ

たのを幸いに、知らん顔をして実験にかけて弄り殺しに殺して、
 唾川小伯爵と山木テル子嬢の中を永久に割さこうという卑劣手段を
 講じているのか」

「……………そんな乱暴な……………メチャクチャです。貴方の云う事
 は……………ボ……………僕と……………そ……………そのテル子嬢とは……………マ……………全く無
 関係……………」

「ナニ卑怯なツ……………」

吾輩は思わず犬を放り出して羽振学士の横よこ面を力一パイ啖く
 わせた。和製バレンチノが一尺ばかり飛上つて、傍の猫の籠の上
 にブツ倒れて、そのままグツタリと伸びてしまった。その拍子に
 鉄網かなあみの蓋が開いて、猫が二三匹ハヤテのように外へ飛出した。

吾輩はその猫と一緒に動物飼養場を飛出した。

アトから聞いたところによると羽振学士は、大切な鼻の骨が砕けて重態に陥ったので、早速、直ぐ近くの大学耳鼻科へ担かつぎ込んで、お手の物で修繕したので、間もなくモトの鼻以上の立派な鼻をオツ立ててピンピン歩き出したという事であるが、考えてみると殴った場所が悪かった。モット取返しべがの附かない処で、鼻柱を引つ剥べがしておけばよかった。アンナ卑怯な奴が博士になったら何をべがするかわからない。

街頭劇名監督

少々荒療治ではあつたが山木断髪令嬢の愛犬UTAを中心として渦巻くピンク色ローマンズの半分は、これで片付いたようなものだ。

吾々のルンペン道は甚だ簡明直截ちよくせつである。

名誉や金銭に縛られて心にもない妥協をしたり苟合こうごうしたり、腐敗したり、墮落したりして、純真な恋を踏み蹂にじつたり、引歪ひきゆがめたり、売物買物にしたりする紳士淑女たちの所謂いわゆる、社交道徳なんていうものとは根柢シキが違ふんだ。アツパカツトか……キツスカ……この二つ以外に行く道はないんだ。天道様てんどうさまと青天井以外に頭を下げる者が不在から自然、物事がそうなるんだ。清浄潔白なもんだ。

吾輩はそうしたルンペン道の代表者である。ユキアタリ・バツ
タリ映画、オール・トーキー、天然色、浮出し、街頭ローマンス
の名監督である。純真生一本きいっぽんの恋以外には取上げない運命の神
様である。だからその純真生一本の盲目の恋だったらイツなんどき何時
でも引受る。身分が何だ。財産が何だ。名誉が何だ。そんなもの
は犬に喰われるだ。丸裸になつて青天井の下で抱き合えだ。……
アハハハ……と笑い出したら、そこいらで遊んでいた子供連が
バラバラと軒の下へ逃込んだ。アハハ。少々キチガイじみていた
かな。

裸体女四五人

ところで少々腹が北山になつて来た。どこかで飯を喰つて、将来の方針をトツクリと一つ考えてみる事にしよう。何をいうにも羽振学士をナグリ飛ばして、肝腎カナメのUTAウータを放ほつたらかして万事を絶望状態に陥れて来たばかりのところ、将来の筋書がまだチツトモ出来ていないんだから困る。野球ならフルベース満塁ツースリーというところだろう。ここで飯を喰つて考えなくちや嘘だ。べらぼう箆棒めえ、キチガイだつて腹は減るんだ。猿の出世したのが人間で、人間の立身したのがキチガイで、キチガイの上が神様なんだから、まだ全智全能とまでは行きかねる吾輩だ。腹が減つて相談相手が欲しくなるのは当り前だ。

どこか美味^{うま}そうな安いものを売っている店はないか知らんとそこいらを見まわしたが、何しろ学校の近くだから見渡す限り本屋、文具屋、牛乳店、雑貨商みたいなものばかりだ。腹の足しになりそうな店なんか一軒もない。

ところがそこから二三十歩あるく^{うち}中に……見付かった。狭い横路地のズツと奥の行止りの処に赤い看板が見える。近寄ってみると真赤な硝子^{がらす}に金文字で「御支那料理」「^{シャンハイ}上海亭」と書いて在る。どうせインチキの支那料理だろうと思つて近寄つてみると豈^{あにはか}計らんや、インチキでない証拠に、店の張出し窓の処にワンタン十銭、シウマイ十銭、チャアシユウ十銭、支那ソバ五十銭と書いた木札を立てて実物が陳列して在る。その上の棚に色んな形

の洋酒の瓶がズラリと並んでいるが、コイツも本物とすれば大したものだ。

吾輩の咽喉のどがキューと鳴った。先ず劈頭へきとうのヒツトを祝するつもりで一杯傾けるかな。

表の硝子扉がらすどを押して中に這入ると真暗だ。おまけにシインとしていて鼠一匹動かない。コンナ飲食店はお客が這入ると直ぐに黄色い声で「イラツシヤイ」と来ないと這入る気にならないもんだ。ドンナ名医でも病室に這入ると直ぐに「イカガデス」とニツコリしない奴は、病人の方でホツとしないもんだ……何かなんと考えながらアンマリ静かなので不思議に思つて、直ぐ横の自由蝶ちようつがい番になつた扉をグーッと押開くと驚いた。

瓦斯^{がす}ストーブの臭気が火事かと思うほどパアツと顔を撲^うつた。

同時に耳の穴に突刺さるような超ソプラノが、一斉に「キャーッ」と湧^{わきおこ}起^こつたと思うと、若い女の白い肉体が四ツ五ツ、揚板をメクられた溝^{どぶねずみ}鼠^{ねずみ}みたいに、奥の方へ逃込んで行つた。

お客様を見てキャーッと云う手はない。しかもダンドン暗がり
に慣れて来た眼でそいつ等の後姿を見ると、揃いも揃つた赤い湯
もじ一貫の丸裸^{まるはだか}体で髪をオドロに振乱しているのには仰天した。
まっぴる^{まっぴる}なか
真^ま昼^{ひる}さ中^{なか}から化物屋敷に来たような気持になつてしまった。

部屋の中は天井から床まで赤ずくめで、赤^{あかうるしぬり}漆塗^{しきぬり}の卓が四ツ
五ツ排列して在る間に、赤唐紙張^{あかとうしはり}の屏風^{びょうぶ}が仕切つてある。そ
の片隅の大きな瓦斯暖炉の前の空隙^{すきま}に、籐^{とう}の安楽椅子が五ツ六ツ

並んで、五月だというのに瓦斯の火がドロドロと燃えている。

四壁に沁み込んだ脂肪と薬味の異臭が引切りなしに食欲をそそる。

やっぱり支那料理屋かな。

クシヤミ行列

めんくらった吾輩がポカンとなつたまま部屋のマン中に突立っている、奥の方の料理部屋らしい処で声がする。向うでは聞こえないつもりらしいが、よく聞こえる。今の女連中の声だ。

「……表の扉とをナゼ掛けとかなかったの」

「困るわねえ。今頃来られちゃ」

「ああ怖かった。まるで熊みたい……ビツクリしちやつたわ」

「まだ居るの」

「ええ。あそこに突立ってギョロギョロ睨にらみまわしているわよ」

「イヤアねえ。何でしょう、あの人……」

「あれルンペンよ。物貰いよ」

「誰か一銭遣って追払って頂戴よ」

「だってこの恰好じゃ出られやしないわ」

「お神さんどこに居んの」

「二階ひるねに午睡してんのよ」

「お初ちゃん呼んで頂戴……一銭遣って頂戴……ね……」

「早くしないと何か持ってかれるわよ。早くさあ」

と云ううちにミシミシと二階へ上つて行く足音がする。

きようは妙な日だ。

百万長者の娘に平身低頭されて、支那料理屋の女に泥棒扱いにされる。

「ああ寒……急に寒くなっちゃった」

「ストーブの傍に居たからよ」

「……おお寒い。風邪を引いちやった。ファツクシン」

「あたしも寒くなっちゃった。ヘキスン……ヘツクスン……」

「ハツクシン……フィツクシイン。風邪が伝染うつったよ」

「ファ——クシヨオ——ン。ウハア——クシヨ——ン……コ

ラ……」

「ホホホ。乱暴な噓ねえ。アンタのは……」

「ああ。涙が出ちやつた」

「まだ洗濯物……乾かないか知ら……」

「一度に洗濯するのは考えもんよ」

「だって隙ひまがなけあ仕方がないわ」

「あんまりお天気が良過ぎたのが悪かつたんだわ」

二階から二人ばかり足音が降りて来た。

「呆れたねえ。何故表の扉とをシツカリ締めとかなかつたの……折せ
角つかくヒトが良い気持ちで寝てたのに……フィツクシン……」

と云う女将おかみらしい声がして、コック部屋兼帳場の入口の浅黄色

の垂幕の蔭から、色の青黒い、まなじり 眦の釣上った、ヒステリの妖怪おぼけじみた年増女の顔が覗いたと思うと、茫然として突立っている吾輩とピッタリ視線を合わせた。

「アラツ……先生じや御座いませんの……まあ……お珍らしい……よくまあ」

と云ううちに浅黄色の垂幕をから繋げて出て来た。生々しい青大将色の琉球飛白がすりを素肌に着て、洗い髪くしまきの櫛くし巻まきに、女たちと同じ麻裏の上草履うわぞうりをは穿はいている。コンナ粹かかな女に識合しあいはない筈だがと、吾輩が首をひねっているにも拘かかわらず、女将はな狃なれ狃なれしく近寄あふつて来て、溢あふるるばかりの愛嬌あじわを滴したたらしながら椅子をすすめた。

拳骨辻占

「まあ……どうも飛んだ失礼を致しまして……場所慣れない若いものばかりなもんですから……お見外れみそ申しまして……さあどうぞ……ほんとにお久し振りでしたわねえ。御無沙汰ばかり……」

「馬……馬鹿云え。お珍らしいって俺あ初めてだぞ。お前みたいな人間には生れない前から御無沙汰つづきなんだぞ……テンデ……」

「オホホホホホ……」

女将の嬌笑が暗い部屋に響き渡った。その背後の浅黄幕の間

から、ビツクリ人形じみた女たちの顔が、重なり合って覗いてい
る。

「オホホホ……恐れ入ります。まったくで御座いますよ先生。こ
の町中の水物屋みずものやで、先生のお顔を存じ上げない者は御座いませ
んよ」

「ハハア。俺に似た喰くいにげ逃にげの常習犯でも居るのか……」

「まあ、御冗談ばかり……それどころでは御座いませんよ先生。
先生のお払いのお見事な事は皆、不思議だ不思議だって大評判で
御座いますよ」

「ううむ。扱さては夜稼よかせぎ……という訳かな」

「そればかりでは御座いませんよ。いつも一杯めし上ると声こわいろ色

使いや辻つじうら占売り、右や左なんていう連中にまで、よくお眼をか
け下さるので、そのような流し仲間では先生のお姿を拝んでいる
ので御座いますよ。先生は福の神様のお生れ変りで、いつもニコ
ニコしておいでになるから縁起えんぎがよいと申しましてね。どこの店
でも心の中で先生のお出でを願っているので御座いますよ先生：
…」

「……ああ、いい気持ちだ。汗ビツシヨリになっちゃった。本気
にするぜオイ……」

「嫌いやで御座いますよ先生。私がまだ十一か十二の時に、両親の病
気を介抱しいしいコチラの遊廓で辻占を売っておりました時分に
……」

「アツ。君はあの時の孝行娘さんかえ。これあ驚いた。そういえばどこやらに面影が残っている。非道いお婆さんになつたもんだね」

「まあ。お口の悪い……でも先生はあの時からチツトも御容子が
お変りになりませんわね。昔の通りのお姿……」

「アハハ。貴様の方がヨツポド口が悪いぞ。変りたくとも変れねえんだ」

「アラ。そんな事じゃ御座いませんわ」

「おんなじ事じゃないか」

「……でも、そのお姿を見ますとあの時の事を思い出しますわ。」

『ウーム。貴様が新聞に出ていた孝行娘か。こっちへ来い。美味うま

墓がまぐち口を見せろ。ホオラ一円札があるじゃないか。コイツを一枚よこせ。釣銭なんかないよ。お釣が欲しかったら明日あしたの朝、絹夜具の中で花魁から捻ねじ上げろ。ナニ、高価たけえ？……シミツタれた文句を云うな。勿体なくも河内瓢箪山稻荷の辻占だ。罰が当るぞ畜生。運氣、縁談、待人、家相、病人、旅立の吉凶よしあし、花魁の本心までタツタ一円でピッタリと当る。田舎一流拳骨げんこつの辻占だ。親の罰より覲てきめん面にアタル……この通り……ポコーン……』とか何とか仰言つて、買つてくれた人の横ツ面つらを……」

「ハハハ。そんな事があつたつけなあ。酔払つていたものだから忘れてしまったわい」

支那料理

「あれから私いろいろと苦勞致しましたわ。両親に死別れてから芸妓げいしやになったり、落語家はなしかの兄さんとくっついて料理屋を始めた

り、それから上海に渡って水商売をやったりして、いくらか大きく致しておりますうちに、上海の戦争で亭主の行方がわからなくなり、それから御鼻ごひいき眞の旦那様からは見放されるしでね。いくらかスコ焼けになりまして……先生にお隠ししたって始まりませんか、真実ほんとのところを申上げるんですけど……私を見放した人には怨うらみが残っておりますし、ここに居ります娘さん達が、私から離れませんかですから、一つ乗るか反そるかで日本へ帰りまして、

やつと二三箇月前にこんな横ツチヨへ店を開きましたのに、モウ先生がお出で下さるなんて縁起がいいどころじゃ御座いませんわ。あたしや嬉しくって嬉しくって、胸がモウ一パイ……」

と云ううちに吾輩の胸へすが縋り付きメソメソ泣き出した。

「いい加減にしろよ。若い女たちが見てるじやないか。モウ一遍俺の手に縋って辻占を売りに出る年でもあるめえ」

「……これからもドウゾこの店の事を、よろしくお頼み申上ます……誰も……どなたも……相談相手になつて下さる方がないのですから」

「フウム、成る程。そういえば何もかも新しいようだな。何だつてコンナ処に支那料理屋なぞ作ったんだ」

「ホホホ。恐れ入ります。どうも表通りにはいい処が御座いませ
んのので、それに支那料理なんて申しますと、どうも横町じみた処
が繁昌いたしますようで……」

「イカニモなあ、ところでホントに支那料理が在るのか」

「オホホ。御冗談ばかり。チャント御座いますわ」

「怪しいもんだぜ。真昼間、表を閉めて、女将さんが二階でグ
ウグウ午睡ひるねをしている支那料理といったら大抵、相場はきまつて
るぜ」

「ホホ。相変らずお眼鏡で御座いますわねえ。どうぞ御遠慮なく
御鼻眞に……へへへ……」

「変な笑い方をするなよ。今日は飯を喰いに来たんだ。腹が減っ

て眼が眩くらみそうなんだよ」

「……まあ……気付きませんで……御酒ごしゆはいかが様で……」

「サア。酒を飲むほど銭ぜにがあるかどうか」

「ホホホ。御冗談ばかり。いつでも結構で御座いますわ。見つくるって参りましょうね」

「ウム。早いものがいいね。それから今のお嬢さん達もこっちへ這入って火に当らせたらどうだい。相手は俺だから構うことはないよ。裸はだか体ズレがしているルンペン様だから恥かしい事はないよ。素裸すっぱだか体の方が気楽でいいんだ。序ついでに生命いのちの洗濯をさしてやろう。面白い話があるんだから……」

「オホホ。あの子たちは今日お天気がいいもんですから、お客の

少ない昼間のうちに申合せて着物のお洗濯をしているのですよ。その着換えが御座いませんで、仕方なしにゆもじ一つでストーブへ当っておりますところへ、先生が入いらつしたもんですから、ビックリして逃げて行つたので御座いますよ。ホホホ。でもねえ、まさか先生の前に裸体で出られやしませんからね、若い女ばかりですから……」

「馬鹿云え。先祖譲りの揃くくじゅばんいの肉襦袢ふんどしが何が恥かしいんだ。俺だつてこの二重マントの下は禪ふんどし一つの素っ裸体なんだぞ。構わな
いからみんなこつちへ這入らせろ」

「ホホホホホホホ。かしこまりました」

女将は嬌笑しいしいイソイソとコック部屋へ引上げると間もな

くポーンと瓦斯焔炉がすこんろへ火の這入る音がした。この家の支那料理うちは女将が自身で作ると見える。序ついでにヒソヒソと女達へお説教をしている声がハッキリと聞えて来る。

「サアサアみんな先生の処へ行つといで。あの先生を知らないのかい。鬚野先生と云つて有名な方だよ。トテモさっぱりしたお方なんだよ。弱い女や貧乏人の味方ばかりしておいになる福の神様なんだよ。先生に顔を見覚えて頂くだけでキットいい事があるんだよ」

「だつて女将さん……」

「何ぼ何だつてこのままじゃあんまりだわ」

吾輩は隙すかさず立上つて怒鳴つた。

「ナア二構わん構わん。そのまんまでこつちへ這入れ。お前たちと話してみたいんだ。俺が今引受けている素敵なローマンズの話をして、お前たちの意見を聞いてみたいんだ。這入れ這入れ。這入ってくれ。風邪を引くぜ」

「……ほら……ね。あんなに仰言るんだから構わないだよ。あの先生は人間離れした方なから。恥かしい事なんか無いんだよ」

「さあさあイラハイイラハイ。大人は十銭、子供は五銭、ツンボは無代償^{ただ}。吾輩^だがこれから自作の歌を唄って聞かせる。ルンペン^だの歌だ。裸ん坊の歌だ。昭和十年の超人の歌だ。エヘンエヘン。さあさあ這入って来たり這入って来たり。

あああああああ

歌が聞きたけあア——野原へお出^いでエ——

青空の歌ア——恋の歌ア——

あああああああ

生命^{いのち}棄てたけア——満洲へお出でエ——

遠い野の涯エ——河の涯エ——

アハハハハ。どうだい。いい声だろう。出て来なけあ、まだまだイクラでも唄ってやるぞ。ハハハハハ」

ソツと聞いていた女たちが、一人一人恐る恐る眼をマン丸にして這入って来た。吾輩の歌に感心したらしく、気抜けしたような

恰好で、吾輩の周囲まわりを取巻きながら、椅子に腰おろを卸した。

そうして一心に吾輩の姿を見上げている半裸の若い女たちの姿を見まわすと吾輩は、森の妖精ニンフに囲まれた半獣神パシみたような気持になった。

「いい声ねえ。おみっちゃん」

「上しゃんはい海にだって居ないわ」

「惜しいわねえ。コンナに町をブラブラさして……ホホ」

……ソレ見ろ……と吾輩はすこし得意になった。イキナリ椅子から立上って山高帽を冠り直したもんだ。

「エエ。こちらはJ O R K東京放送局であります。只今……エー
ト……只今午後二時二十七分から、支那料理が出来上ります。空

腹のお時間を利用して、昼間演芸放送を致します。演題は『街頭歌二曲』、最初は野尻雪情氏作『銀座の霧』、次は南原みなみはらこ黒春くしゆん氏作『赤い帽子』、デタラメ・レコード会社専属鬚野房吉氏作曲、自演……了々軒ストーブ前から中継放送……誰だいをタタク奴は。

銀座の霧

夜の銀座にふる霧は　ほんに愛いとしや懐かしや
 敷石濡らし灯ひを濡らし　可愛こいあの娘この瞳めを濡らす
 夜の銀座にふる霧は　ほんに嬉こしや恥かしや
 帽子を濡らし靴濡らし　握り合わせた手を濡らす

赤い帽子

この世は枯れ原ススキ原　ボーボー風が吹くばかり

赤い帽子を冠ろうよオ——

赤い帽子が真実のほんとう　タツタ一つの泣き笑い

道化踊りを踊ろうよオ——

ああくたびれた」

「お待まちどお遠様。やっとお料理が出来ました。御酒は何に致しまし

ようか。老酒ラオチユ、アブサン、サンパンぐらいに致しましょうか」

「ウワア。そんなに上等の奴はイカン。第一銭ぜにが無い」

「オホホ。恐れ入ります。御心配なさらなくともいいんですよ。

これはJ O R Kからのお礼ですから」

「そんなに煽おだてると今度は踊りたくなるぞ」

「どうぞ今日はお願ひですから御存分に皆を遊ばしてやつて下さいまし。さあさあお前達は何をボンヤリしているの……お酌をして上げなくちや」

「アハハハ。これあ愉快だ。裸一貫のお酌は天あまの岩戸いわと以来初めてだろう」

「妾わたしにもお盃を頂かして下さい」

「オイ来た。ところでお肴さかなに一つ面白い話があるんだが聞かしてやろうか」

「相済みません。先生にお酌を願つて……どうぞ伺わして下さい」
「ウム。スレッツカラシの君が聴いてくれるとあればイヨイヨあり

がたい。アハハ、^{おこ}憤るなよ。スレッツカラシというのは世間知りという意味だよ」

「面白いお話って活動のお話ですか」

「そんなチャチなんじゃない。ありふれた小説や芝居とは違うんだ。みんな現在、お前さんたちの眼の前で……この吾輩の椅子の上で進行中の事件なんだ。しかも、そこいらの活動のシナリオよりもズツ面白い筋書が現在こうして盃を抱えながら進行しているんだから奇妙だろう——」

「まあ。それじゃ妾たちもその事件の中で一役買っているので御座いますか」

「もちろんだとも。しかもその筋書の中でも一番重要な役廻りを

受持つて、これから吾輩を主役としたスバラシイ場面を展開すべく、タツタ今活動を始めたばかりなんだ。モウ逃げようたつて逃げる事が出来なくなっているんだ」

「まあ。否^{いや}で御座いますよ先生、おからかいになつちや……気味の悪い……」

「イヤ。断然、真剣なんだ。まあ聞け……コンナ訳だ」

吾輩はそこで今朝^{けさ}からの出来事を出来るだけ詳しく話して聞かせた。

「どうだい。みんなわかつたかい。だから詰まるところこうなるんだ。今度の事件は一切合財、みんな偶然^{でたらめ}の出鱈目ばかりで持ち切っているんだ。吾輩が断髪令嬢の御秘蔵の犬と知らずに搔^かつ払^{ばら}

つたのも偶然なら、その犬を断髪令嬢の恋敵こいがたきの医学士の所へ持つて行つて売付けたのも偶然だ。しかもその犬が世界に二匹と居ない名犬だったのも偶然なら、その犬が肺病の第三期にかつたのも偶然。そこへ羽振医学士が又、偶然に來合せて、吾輩が振りまわす拳固げんこを高い鼻の頭で受け止めたのも偶然だ。つまりところ、そこに神様の思おぼしめし召が働いているに違いないと思うんだが、ドウダイ議員諸君……」

議員諸君が顔と顔を見合わせ始めた。

「まあ……羽振つていう人は、あのウチへ來る医学士さんじゃないの……男ぶりのいい……ねえ女将さんおかみ」

「あのバレンチノさんよ。ね、お神さん。キットそうよ」

女将が眼を白くして首肯うなずきながら襟元を突越した。椅子の上から一膝ひとひざ進めた。

「まあ。只今の先生のお話は、みんな本当で御座いますの」

「何だ。今まで作りごとだと思って聞いていたのかい」

「……ド……どこに居りますの。その医学士は……憎らしい」

「オツトツト、そう昂奮するなよ。何も直接にお前たちと関係のある話じゃないだろう」

「それが大ありなんですよ、馬鹿馬鹿しい」

と女将が大見得おおみえを切った。

「ふうん。女将さんと関係があるのかい」

「あるどころじゃないんですよ、阿呆あほうらしい。あの羽振といった

らトテモ非道いカフエー泣かせなんですよ。男ぶりがいいのと、
医学士の名刺に物をいわせて、方々のカフエーを引っかけまわつ
て、この家^{うち}にだつても最早^{もう}、二百円ぐらい引っかかりがあるんで
すよ。新^{しん}店^{みせ}だもんですから、スツカリ馬鹿にされちやつたんで
すよ。口惜しいつたらありやしない」

「フーム。そんな下等な奴だったのかい、アイツは……そんなら
モット手非道^{てひど}く頬^ほ桁^{おげ}をブチ壊してやれあよかった」

「そして……ド、どこに居るんですか」

「多分、耳鼻咽喉科かどつかに入院しているだろう」

「……あたし行つて参りますわ。直ぐそこですから……ちよつと
失礼……」

「ちよつと待て……」

「いいえ、棄てておかれません。今まで何度となく勘定書を大学に持って行つたんですが、どこに居るかサツパリわかりませんし……タマタマ姿を見付けても案内のわからない教室から教室をあつちへ逃げ、こつちに隠れしてナカナカ捕まらないのですよ。入院していれあ何よりの幸いですから……ちよつと失礼して行つてまいります」

「ま……ま……待て……待てと云つたら……いい事を教えてやる。確実に勘定の取れる方法を教えてやる。アイツは現金なんか持つてやしないよ」

「それはそうかも知れせんわねえ」

女将は、すこし張合抜けがしたように椅子へ引返した。

「それよりもねえ、彼奴あいつの親父の処へ勘定を取りに行くんだ」

「まあ。彼奴うちの家を御存じですの……それがわからないお蔭で苦
勞しているんですよ。誰なんですか一体、羽振さんの親御さんは

……」

「知らないのかい」

「存じませんわ。教えて下さいな」

「あの有名な貴族院議員さ」

「まああああ——アアア」

五六人の女が部屋の空気を入れ換えるくらい大きな溜息をした。
そのマン中に女将は頭を下げた。

「ありがとうございます御座います鬚野先生……ありがとうございます御座います。それさえ解れば千人力……」

「ま……ま……まあ早まるな。相手の家はわかつて、なかなかお前たち風情ふぜいが行つて、おいそれと会つてくれるような門構えじやないよ。万事は吾輩の胸に在る。それよりも落付いて一杯注つげ……ああいい心持になつた。どうも婆ばばあのお酌の方が実があるような気がするね」

「お口の悪い。若い女でも実のあるのも御座いますよ。ここに並んでおります連中なんか、上海でも相当の手取りですからね」

「アハハハ。あやまつたあやまつた。お見外みそれ申しました。イヤ全くこんな酒宴さかもりは初めてだ」

「日本は愚か、上海にも御座いませんよ」

「ところでどうだい。最前からの話の筋の中で、羽振医学士の方は、吾輩の拳骨一挺で簡単に型が付いた訳だが、今一人居る断髪令嬢の許嫁いいなづけの小伯爵、唾川歌夫の方はドウ思うね、諸君。その親孝行の断髪令嬢のお婿むこさんに見立てて、差支え無いだろうか。吾輩は赤ゆもじ議員諸君の御意見通りに事を運びたいのだが……」

「ほんとに貴方は神様みたいなお方ですわねえ。何もかも見透して……」

「ところが、今度の事件に限って吾輩は、すこし取扱いかねているのだ。未だその断髪令嬢の涙ながらの話聞いただけなんでね。唾川小伯爵がドンナ人間だか一つも知らずにいるんだ。そこへ取

りあえず羽振医学士にぶつかつて、コイツはイケナイと気が付いたから、筋書の中から叩き出してしまった訳なんだが、しかし、これから先がどうしていいかわからないので困っているんだ」

「まったくで御座いますわねえ、わたくし共でも、見当が付きかねますわ」

「ウム。だから実は君等にこうして相談してみる気になつたもんだがね、一つ考えてくれよ。いいかい。この吾輩が詰まるところ運命の神様なんだ。そうして君等の指図通りにこの事件の運命を運んでみようと思つてこうして相談を打^ぶつているんだ。ドンナ無理な筋書でも驚かない。ドンナ無鉄砲な場面でも作り出して見せようてんだから、一つ大いに意見を出してもらいたいね」

「……センサー……ホントに妾たちの考え通りにして下さる？」

吾輩の横に腰をかけていた一番若い、美しい、切前髪きりまえがみの娘が瞳めを光らして云った。

「するともするとも。キットお前達の注文通りに筋書を運んで見せるよ。実物を使って実際に脚色して行くという斬新奇抜、驚天動地の世界最初の実物創作だ。喜劇でも悲劇でもお望み次第に実演させて見せる……」

「でもねえ先生……」

女将の横に居る肥ふとつちよの一番肉感的な女が、細長い眉まゆを昂あげて、薄い唇を翻した。

「あたし疑問が御座いますわ」

「あたしもよ……どうも初めっからお話が変なのよ」

「あら、あたしもよ」

「ほう、みんな吾輩の話に疑問があるって云うんだな。ふうむ、面白い。念のために断っておくが、俺はチツトばかりアルコールがまわりかけている。しかしイクラ酔っ払っても、話を間違えた事は一度も無い男だぞ」

「アラ、先生。そうじゃないんですよ。先生のお話がヨタだなんて考えてるんじゃないわ。先生のお話が真実百パーセントとして聞いても、あたし達の常識が受け入れられないところがあ
るから……」

「ウワア、こいつは驚いた。恐しく八釜やかましいのが出て来た。何か

い、君は弁護士試験か、高文試験でも受けた事があるのかい」

「そんなことありませんわ。これだけ五人でお給金を貯めて上海の馬券を買って、スツカラカンになったことがあるだけですよ」

「イヤ、これはどうもオカカの感心、オビビのビツクリの到りだ。君等にソレだけの見識があるうとは思わなかつた」

「まったくこの五人は感心で御座いますよ。上海でこの店が駄目になりかけた時に、五人が腕に撚よりをかけて、旦那を絞り上げて日本へ帰る旅費から、この店を始める費用まで作ってくれたので御座いますよ」

「……吾輩……何をか云わんやだ。この通りシャツポを脱ぐよ。君等こそプロレタリヤ精神の生きツ粹すいだ。日本魂の精華だ。人間は

そうなくちやならん。その精神があれば日本は亡びてもこの了々亭だけは残るよ」

「そんな事どうでもいいじゃありませんか先生。それよりも今のお話ですね」

「うんうん。どこが怪しい」

「怪しいって先生……その唾川歌夫っていう人も、いい加減気の知れない人ですけど、そのコンクリート市会議員の断髪令嬢っていうのが、一番怪しい人物だと思いますわ」

「ふうむ。これは驚いた。何で怪しい。この事件の女主人公ひろいんが怪しいとは言語道断……」

「あたし久し振りに日本に帰って来たんですから、今の女の人の

気持はよくわかりませんが、ソナに内気な親孝行な人が、そんな年頃になるまで断髪しているものでしょうか……許嫁の人から貰った犬が居なくなつたといつて泣くような人が……」

「フウム、これは感心したな。ナカナカ君等の観察は細かい。そこまでは考えなかつた」

「ええ、きつと眉唾もんよ、そのお嬢さんは……」

「あたし日本の断髪嬢嫌いよ、テンデ板に附いていないんですもの。汚ない腕なんか出して……」

「アハハ、これあ手巖しい」

「当り前よ。腕を出すんなら子供の時分から腕を手入れしとかなくちや駄目よ。イクラ立派な肉附きの腕だつても、葉巻のレッテ

ルみたいな種痘ほうそくのアトが並んでいたり、肘ひじの処のキメが荒いく
らいはまだしも、馬かかとの踵かかとみたいに黒くろずんで固かたくなつて捻つねつても痛
くも何ともないナンテいう恐ろしいのを丸出しにしているのは、
国辱以外の何ものでもアリ得ないと思うわ」

「ヒヤア、これは恐れ入った。国辱国辱、正に国辱。銀座街頭の
女はみんな落第だ」

「上海の乞食やち女ぢにだつてアンナのは一人も居やしないわ。どんな
男でもあの肘ひじの黒いトコを見たら肘鉄ひじてつを喰くわない中うちに失礼しつれいしち
やうわ」

「断髪だつてそうよ。櫛目のよく通る日本人の髪を切るなんてイ
ミ無いわ」

「まあ待て待て。脱線しちゃ困る。ほかの断髪嬢ならトモカク、あのテル子嬢の断髪なら、お母さん譲りだけあつてナカナカ板に附いているぞ」

「おかしいわねえ。そんなお母さんだったら娘さんはイヤでも反感を起して日本髪に結ゆうものだけど……妾わたしならそうするわ」

「ちよいと先生。その伯爵様つていうのも妾、何だか怪しいと思うわ。先生のお話の通りだったら」

「フウン。容易ならん事がアトカラアトカラ持上つて来るんだな、これあ。どこが怪しい、名探偵君……」

「だって、そんな冷淡な許嫁なんか恋愛小説にだって無いわ。せいぜい一日に一度ぐらいは訪ねて来なくちや嘘よ」

「それにねえ先生。その断髪令嬢のお父さんのコンクリート氏が引っぱられてからというもの、一度もそのお河童かっぱさんの処に訪ねて来ないなんて、よつぽどおかしいわ」

「ねえ先生。これを要するにですねえ、先生」

女将はボオツと来ているらしい。しきりに舌なめずりをして眼を据えた。

「ウフウフ。これを要しなくたっていいよ」

「いいえ。是非ともこれを要する必要が御座いますわ。どうも先生の仰おっしゃ言る実物創作の筋書つていうのは、カンジンの材料テーマが二割引だと思えますわ」

「ヒヤツ。材料テーマとおいでなすったね。どこでソナナ文句を仕入れ

「たんだい」

「あたしの二代前の亭主が小説家だったんですもの。自然主義の大將とか何とか云われていたんですけど、創作なんか一度もしないで、実行の方にばかり身を入れちゃって、とうとう行方知れずになったんですからね。材料^{テーマ}って言葉は、その悲しい置土産なんですの」

「ふむ。自然主義なら吾輩にもわかるが、とにかくこの創作を完成しなくちゃ話にならない」

「駄目よ先生。そんな創作無いわよ。モウすこし人物を掘下げてみなくちゃ。中心になっているお河童さんの恋愛だって、本物だかどうだか知れたもんじゃないわ」

「ウーン。そういえば何だか吾輩も不安になって来た。一つ探偵し直しに行ってみるかな」

「どこから探偵し直しをなさるの」

「さあ。そいつが、まだ見当が附いていないんだ。もう一度あのお河童令嬢に会ってもいい。犬のお悔みを申上げてお顔色拝見と出かけるかな」

「駄目よお、先生。又欺だまされに行くだけよ。第一印象でまいつていらつしやるんですからね、先生は……」

「ねえ先生。思い切つて小伯爵のお父さんか、お母さんに会つて御覧になつてはどうでしょう。そうして何も彼かも打明けて、意見を聞いて御覧になつては如何いかがでしょう」

「よし。それじゃ方針がアラカタきまつたから出かける事にしよう」

「まあお待ちなさいよ。そんな恰好で入らつしたつて会えやしませんよ。伯爵なんてシロモノは……今電話をかけて来ますから……自動車おごを奢おごつて上げますからね」

「エツ。自動車を奢る？」

「ええ。羽振の居所を教えて下さつた、お礼ですよ。……まあ聞いていらつしやい」

女将が何かしらニコニコ笑つて立上つた。コック部屋の横の帳場に坐り込むと、電話帳を調べてから念入りにダイヤルをまわした。

特別に品のいいオリイブ色の声を出した。

「モシモシ、モシモシイ。唾川伯爵様のお宅でいらっしやいますか。ハイハイ、コチラはねえ、アノこちらはねえ、大学前の自働電話で御座いますかねえ……ハイハイ。私はねえ、唾川様の若様を存じ上げております女で御座いますかねえ……」

貞操オン・パレード

「あのモシモシ……私は或る女で御座いますがねえ。ホホホ。それは申上げかねますがねえ。アノ若様は……そちらの小伯爵様は只今、御在宅でいらっしやいますか。……ハイハイ。あの三週間

ばかり前から御不在……あら、左様さようでいらつしやいますか……どうも相あいすみません。こちらはアノ。その若様の代理で御座いますかねえ。ハイ間違ひ御座いません。それでお電話を差上るので御座いますが……その若様の御身おみの上について大切な御報告を申上げたい事が御座いますので……ハイハイ。どうぞ恐れ入りますが伯爵様へ直接にお取次をお願い致したので御座いますが……ハイハイ。かしこまりました……」

女将は平手で電話口を蔽おおいながら、吾輩をかえり見てニタリと笑った。

「何だ小伯爵は失踪してるのかい」

「ええ。そうらしいんですよ。唾おし川がわ家は大変な騒さわぎらしいんで

すよ。今出て来た三太夫さんだゆうの慌て方といったらなかつたわ」

「ウム。よく新聞記者に嗅付けかぎつられなかつたもんだな」

「まったくですわねえ。でもコツチの思う壺ですわ」

「ウム。面白い面白い。その塩梅あんばいでは秘密探偵か何かがウンと

活躍しているだろう」

「ウチ鬚野先生をスパイじゃないかと思つたわ」

「シツシツ」

女将が又電話口で話を始めたので皆サインとなつた。

「あの……伯爵様で御座いますか。お呼立ていたしましたして、ハイハイ。かしこまりました。それでは直ぐにこれからお伺い致します。イエイエ。決して御心配なことは御座いません。何もかもお

眼にかかりますれば、すっかりおわかりになりますこと……あの誠に恐れ入りますが、わたくしお宅を存じませんから、そちらのお自動車を至急に大学の正門前にお廻し下さいませんでしようか。あそこでお待ちして手をあげますから、ハイハイ。お自動車は流線スターの流線型セダン。かしこまりました。では御免遊ばしまして……」

「巧いもんだなあ。流石さすがは凄腕だ。上海仕込みだけある。流線スターといったら、東京に一つか二つ在る無しの高級車だぜ」

「アラ、乗ってみたいわねえ」

「ウフ。乗せてやるから一緒に来い」

「あたしも乗りたいわ」

「ウム。みんな来い。モウ着物は乾いたろう」

「アラ、厭な先生、乾ほしてんのは普段着よ。晴着はチャント仕舞つてあるわよ」

「ヨオシ。出来るだけ盛装して来い。貞操オン・パレードだ」
女たちが関ときの声を揚げて喜んだ。

「鶴子さん。アンタはね、洋装がいいわ。出来るだけ毒々しくお化粧しておいでよ。伯爵様にお目見えするんですから……」

「アラ、女将さん。あたし怖いわ」

「怖いことあるもんですか。その方がいいのよ。妾わたしに考えがあるんですから……」

鶴子というのは一番最初に吾輩に口を利いた一番若い美しい娘

であつた。

「まあ先生。ソナナに酔払つて大丈夫？」

「大丈夫だとも。酔っている真似は難かしいが、酔わない真似なら訳はないんだ。キチンとしていれあいんだからね」

禿頭変色

吾々一行の姿を他人が見たら何と云うだろう。

葬式自動車みたいな巨大な箱車うちの中に、令嬢だか、女給だか、

籠かご拔ぬけ娼しょうぎ妓だか、マダム・バタフライだか、何が何やらエタイ

のわからない和洋服混交の貞操オン・パレードがギツチリすしづ鮮詰め

になつてゐるその中央に、モダン鍾馗しやうき大臣の失業したみたいな吾輩が納まり返つてゐるんだから、何の事はない一九三五年式大津絵だろう。

その一団を乗せた流線型セダンが音もなく迂すべり出すと、吾輩は急に睡くなつてグーグーと居睡りを始めた。自分の鼾いびきの音が時々ゴウゴウと聞こえる。女たちのクスクス笑う声を夢うつつに聞いている中に自動車うちがピッタリと止まったので、吾輩は慌てて女たちの膝を跨またいで一番先に飛降りて扉をパタンと締めた。

「お前たちはこの中で暫く待つてろ。吾輩が談判の模様によつて呼込んでやるから……」

と云い棄てるなりフラフラしながら玄関の石段を上った。待つ

ていたらしい唾川家の家令だか三太夫だか人相の悪い禿はげ頭あたまが、
 吾輩の姿を見ると眼を剥むき出して睨み付けた。睨み付けるのも無
 理はない。オリイブ色の声なんかどこを押したって出そうな面構
 えじゃない。たしかに人間が違っているに相違ないのだから……。

「貴方は……何ですか……」

「老伯爵閣下に会いに来た人間だ」

「……ナニ……」

と云うなり禿頭が腕をまくった。柔道の心得か何かあるらしい。
 吾輩の胸をドシンと突いたが、吾輩微動だにしなかった。向うに
 柔道の心得があればコツちにルンペンの心得がある。相手が用人
 棒だろうが何だろうが、身構えたら最後、金城鉄壁、動く事な

い。

「……か……閣下は貴様のような人間に御用はない」

「ハハハ、そっちに用がなくともこっちにあるんだ」

「ナ……何の用だ……」

「貴様のような人間に、わかる用事じゃない。人柄を見て物を云え。何のために頭が禿げているんだ」

禿頭の色が紫色に変わった。慌てて背後の扉うしろ ドアにガツチリと鍵をかけた。

「会わせる事はならん」

「八釜やかましい」

と云うなりその紫色の禿頭を平手で撫でてやったら、非常に有

難かったと見えて、羽織袴のまんま玄関の敷石の上に引っくり返
つてしまった。その間に吾輩は巨大な真鍮張りの扉しんちゆうばに両手ドアをか
けてワリワリワリドカンと押し開けた。そこから草原くさはらみたいな柔
らかな絨壇の上に乗って、背後うしろをピッタリと締切ると、外でワン
ワンワンとブルドッグの吠える声と、自動車の中で女たちの悲鳴
を揚げて脅える声が入り交つて聞えて来た。ブルドッグという奴
はいつでも気の利かない動物らしい。

癩癩くらべ

そんな事はドウデモ宜い。吾輩はグングンと廊下に侵入した。

暗い廊下の左右に並んでいる部屋を一つ一つ開いて検分して行く中に、一番奥の一番立派な部屋の中央に、巨大なロココ式ガラス張りのシャンデリヤが点つてゐるのを発見した。

そのシャンデリヤの下に斑白、長鬚のガツチリした面つきの老爺が、着流しのまま安楽椅子に坐つて火を点けながら葉巻を吹かしている。写真で見たことのある唾川伯爵だ。七十幾歳というのに五十か六十ぐらいにしか見えない。嘗ての日露戦争時代に、陸海軍大臣がハラハラするくらい激越な強硬外交を遣つ付けた男で、この男の一喝に遭うといひ加減な内閣は一と縮みになつたものだから痛快だ。成る程、掛矢でブンなぐつても潰れそうもない面構えだ。取敢えず敬意を表するために、吾輩は山高帽を脱

ぎながらツカツカと進み寄つて、うやうや恭しく頭を下げた。

「…………キ…………貴様は…………何か…………」

まるで頭の上に雷が落ちたような声だ。頭を上げて見ると伯爵は安楽椅子から立上つて、吾輩を真白な眼で睨み付けている。露国の蔵相、兼、外相ウイツテ伯を縮み上らせた眼だ。しかし吾輩は、わざと哄笑してみた。

「アハハハ、私は鬚野房吉というルンペンです」

「…………ナ…………何だルンペンとは…………」

「ルンペンというのは独逸ドイツ語です。独逸語で檻ぼろ樓の事をルンペンというところから、身なりとか根性とかがボロボロに落ちぶれた奴の事をルンペンというようになったのです。御存じありません

か。日本にも勲章を下げて、立派な家うちに住まったルンペンが、イクラでも居りますよ」

伯爵は立腹の余り口が利けなくなつたらしい。葉巻をガチガチと噛んで、鬚をビクビク震わせている。

吾輩は、すこし気の毒になつたから、心持ち言葉を柔やわらげた。

「伯爵閣下、実は今日お伺い致しました理由は、ほかでは御座いません。御令息の唾川歌夫君の事についてです」

「黙れっ……黙れっ……吾輩の家庭の内事は吾輩が決定する。貴様等如きの世話は受けんツ……」

吾輩はここに到つてカンシヤク玉が破裂した。この老翁おやじは外交問題と家庭の内事をゴツチャにしている。ドンナ豪えらい人間でも、

自分の妻に関する事を他人から話出されたら一応は頭を下げ、傾聴すべきものだ。

「ええこの馬鹿野郎。貴様等如きとは何だ。吾輩はこれでも一個独立の生計を営む日本国民だぞ。聊かの功績を云い立てにして栄位、栄爵を頂戴して、無駄飯を喰うのを光栄としているような国家的厄介者とは段式が違うんだぞ。日露戦争の時には俺の発明した火薬が露助にモノをいったんだぞ。日本の医学は吾輩の努力のおかげで、今日の隆盛を来しているんだ。しかも吾輩は国家に何物をも要求しない。毎日毎日この通りのボロ一貫で、途に落ちたものを拾って喰ってるんだ。苟も君のためや、親子兄弟、妻子朋友のためになる事ならば無代償で働くのが日本国民だ。伯爵が何だ。

正三位が何だ。そんな乾ひからびた木み乃伊いらみたいな了簡だから、伴せがれが云う事を聴かないで家うちを飛出すのだぞ」

女将の凄腕

多分顔負けしたんだろう、伯爵閣下は、よろよるとよろめいて背後うしろの椅子にドシンと尻餅を突いた。病み犬が逃げ吠えするよう
に、モノスゴイ眼で吾輩を睨んだ。

「黙れ、伴は家風に合わん女を貰おうとしたから余が承知しなかつたのじゃ。出て行けと云うたのじゃ」

「へへ。伴は喜んだらう。コンナ店たなざら曝しの光栄を引継いで、一

生無駄飯を喰うのを自慢にするような腐った根性は今の若い者は持たないのが普通だぞ。又コンナ家うちに嫁入つて来て、コンナ家風に合うような女だつたら、虚栄心だらけのお茶っぴいか。魂のない風船娘にきまつているんだ」

吾輩がここで滔とうとう々と現代女性觀を御披露しようとするところへ背後の扉ドアがガチャリと開あいて、思いもかけぬ警官が二人威儀を正して這入はいつて来た。伯爵閣下うやうやに恭しく敬礼すると、物をも言わず吾輩のマントの両袖を掴んだものだ。多分正氣付いた家令が電話でもかけたんだらう。

「何をするんだ」

と吾輩は二人の顔を振返つたが、二人とも吾輩を知らない新顔

の警官らしい。やはり無言のまま無理やりに吾輩を引っぱって行くとしたが、そのはずみに吾輩のマントの両袖がスツポリと千切れて、二人の巡査が左右に尻餅を突いた。吾輩は思わず噴出した。

「アハハハハ。飛んだ景清かげきよのシコロ引きだ。これが泥棒だったらドウなるんだい。ハハハハハ」

「ホホホホホホホホ」

「ほほほほほほほほほほ」

思いがけない大勢のなまめかしい声が聞こえたので、ビツクリして振返ってみると、自動車の中に待たせておいた連中がゾロゾロと這入って来た。洋装、和装、頬紅、口紅、引眉毛ひきまゆげ取り取り

にニタニタ、ヘラヘラと笑い傾けながら、莊嚴を極めたロココ式の応接間に押し並んだところは、どう見ても妖怪だ。その妖怪中の妖怪とも見るべき上海亭の女将は、唾然となつている警官を尻目にかけてながら、しやなしやなと歩み出て恭しく伯爵閣下に一礼した。

「オホホホ、ずいぶんお久し振りで御座いましたわねえ、伯爵様。先年北支那の王魁おうかいせき石さんと秘密に上海でお会いになつた時には、手前共の処を大層御鼻眞下ごひいきさいまして、ありがとう御座いました。あの時に御引立に預りました娘たちを御覧遊ばせ、皆もうコンナに大きくなりまして御座いますよ。あれから間もなく私どもは上海を引上げまして、コチラの大学前に、店を開きましたので、そ

のうちに一度は御挨拶に出なくちやならないならないと存じながら、
 ついつい御無沙汰致しておりましたが、今日は又思いがけなく、
 コチラの若様の事で、是非ともお伺いしなければならぬ事が出来
 ましたので、ついでと申しては何で御座いますが、みんな引連れて
 御伺い致しましたような事で御座います。オホホホホ」

老伯爵は棒立ちに突立ったまま、眼を白黒させて唾液を嘔つばきんだ。
 吾輩も余りの事に、棒立ちに突立ったまま、唾液つばきを嘔まざるを得
 なくなつた。

言語道断

「私が若様を存じ上げていると申しましたら不思議に思召すおぼしめで御座いましょう。ところが若様は流石さすがにチャキチャキの外交官でおいで遊ばすのですから抜け目は御座いません。伯爵様が、私どもの店を御鼻肩おしやになっております事を、よく御存じでね。外務省の御用で上海へお出でになるたんびにお父様の御遺跡を御覧になりたいと仰おつしや言つて私どもの処へお立寄りになりましたので、私どもでも特別念入りに御世話申上げましたところが、大層御意ぎよいに叶かないましたらしく、ずっと引続いて今日まで御引立こうむを蒙かかっているの
で御座いますよ。ホホホホホホ。

……そう致しましたらね。私どもがコチラへ参りましてからの
事で御座いますよ。若様が、わざわざ私どもの処へお運び下さい

まして、コンナ御相談をなさるので御座います。……自分が仏蘭フラ西ンスから帰った後のちに、山木という市会議員のお嬢さんのテル子さんと仰言る方と婚約していたら、その山木さんが疑獄で別荘にお出でになったとかで、伯爵様が、そのお嬢様との婚約を諦めてしまえ、羽振さんからの婚約の申込を受けろと仰言つて、どうしても御承知にならない。一方にそのお嬢様のおウチではお母様が脳の御病気で入院なすつて、当分お帰りになる見込がなくなった上に、お父様のお妾めかけさんだか何だかわからない女が、凶々しく家政婦とか何とかいって乗込んで来てお嬢様のテル子さんを邪魔にするので、テル子様は泣きの涙で暮しておいでになるのが若様としては見ちやいられないが、これはドウしたらいいだろうと仰言つて、

私に御相談が御座いました」

「ううむ。怪けしからん奴だ。親に相談すべき事を……ううむ」

と老伯爵が唸った。こうなると伯爵もへつたくれもあつたものじやない。父親としての面目までも、丸潰れの型なしだ。しかし女将おかみは一切お構いなしで、持つて生まれた一瀉いっしやせんり千里のペラペラを続けた。

「ホホホホホホ、ほんとに怪けしからないお話で御座いますよ。こうした行き違いのソモソモがどこから始まつておりますか、私どもは無学で御座いますから、わかりませんが、とにかくこれは容易ならぬ伯爵家の大事件と存じましてね。万一このようなお話が、外へ洩れるような事があつては大変と存じましたから、わ

たくしの一存で、色々と苦心致しました揚句、山木さんのお留守居の人達に承知させまして、手前共の店に居ります娘たちうちの中で一番お嬢様によく肖にておりますツル子と申します女優の落第生を、山木さんの処へ換え玉に入れて世間体せけんていをつくろいまして、お嬢様を私の処へお匿かくまい申上げました。そう致しまして外務省から病気休暇をお取りになったコチラの若様と御一緒に、お好きの処へ新婚旅行にお出し申しましたが、もう十分にワインド・アップがお済みになって、東京のどこかへお帰りになっている筈で御座いますよ。近頃のお若い方は何でもスピードアップなさるのがお好きで御座いますからね」

「ううむ。いよいよ以てケシカラン……」

伯爵ネギリ倒し

「ホホホ。そう致しましたら何しろタツタ一人のお世継の事で御座いますから、伯爵様がキツト若様をお探しになるに違いない、その御心配の潮時を見計みはからいまして、私がコチラへお伺い致しますて、万事のお話を拜聴致しまして、失礼では御座いますが御家の御為になりますように取計けりたいと存じた次第で御座いますかね。まことに怪けしからぬ御恩報じとは存じましたが、無学な私どもの才覚には、ほかに致しようが御座いませんでしたのでね、ホホホ」

「……………」

「ところが、そのうちに私の処から換え玉に這入っておりますツル子と申します女が退屈の余りで御座いましょう。ツイ芝居気を出しましてね。お嬢さん生活の退屈^{しの}に、そのテル子さんの大切な犬が盗まれているのを、この鬚野先生に取返して下さいるようにお頼みしたところから事が起りまして、とどのつまり、鬚野先生が私どもの処へ偶然お乗込みになって、こちらの小伯爵様とそのテル子嬢を御一緒にするかどうかっていう御相談がありましたから、これは何よりの事と存じまして、こうしてお伺い致しました次第で御座いますが、如何で御座いましょうか。この御縁談を御承知下さいませんか。新聞種になんかおなりになり

ませぬ中に、御承知になりました方が、御身分柄お得意じゃないかと考えるので御座いますが、どのようなもので御座いましょうか」
今度は吾輩が驚いた。老伯爵の次には吾輩がペシャンコになつてしまった。これ程手厳しく一パイ喰わされた事は未だ曾てない。彼の断髪令嬢が真赤な掴ませものであるとは……そうして真実に一切を支配している運命の神様がこの吾輩でも何でもなかつた。この上海亭の女将であつたらうとは……。

況んや老伯爵に到つては徹底的にペシャンコになつてしまったらしい。真青になつて椅子の中に沈み込んでしまったのは気の毒千万であつた。左右を見ると二人の警官はいつの間にか部屋を迂り出てしまつてゐる。

そこで吾輩は改めて老伯爵の前に進み出た。

「どうです伯爵閣下。御名誉とか、お家柄とかいうものばかり大切がって、切れば血の出る若い生命の流れを軽蔑なさるからコンナ事になるのです。倅には内うちかぶと兜みすを見透かされる、女将には冷やかされる……」

「アラ、冷やかしなんかしませんわ。勿体ない」

「これぐらい冷やかしゃ沢山だ……」

老伯爵はポロリポロリと涙を流し始めた。頬の肉をヒクリヒクリと引釣ひきつらせながら、哀願するように女将の顔を見上げた。

「いや、わしが悪かった。わしが悪かった。ところで倅はどこに居る」

こうなると老人はみじめだ。何よりも先に考えるのは我児わがこの事だ、ここまで来ると、ルンペンも華族もタダの人間だ。

「ホホホ御安心遊ばせ、伯爵様。若様は最前から……」

と云ううちに部屋の入口に並んでいる女たちを押分けて、スマートな旅行服の青年が颯さつ爽そうと這入つて来た。

「お父様、只今。お話は最前から廊下で承つておりました。御心配かけて相済みません。上海亭から別の自動車で追っかけて来ておりました」

「おお帰ったか」

老伯爵の両眼から新しい涙が溢れ出した。

「そうして……その……花嫁はドコに居る」

女将が振返つて、背後うしろに並んでゐる五人の女を見渡した。する

とその中から顔を真赤にした洋装の一人がおずおずと進み出て、老伯爵に向つて一礼した。最前上海亭で一番最初に吾輩に質問を試みた鶴子だ。唇と頬ペタを紅べにガラ色に塗つて、見事な腕を肩の上から露出しているところは誰が見ても街の女としか思えない。

老伯爵は眼を剥むいた。眼を剥く筈だ。花嫁が淫売姿で堂上どうじやう方たへ乗込むなんて手は開かい闢びやく以来なのだから……。

「アハハハハ成る程。これじゃイクラ探してもわからないじやろう。イヤ、お嬢さん、知らんで失礼したの……」

吾輩がシャツポを脱ぐと、令嬢も媽にこやか然かにお礼を返した。

「わたくしこそ……でも色々とお親切に、ありがとう御座いまし

たわ」

土管の中へ

「イヤ、名優名優。吾輩の前で、あれ程、シラを切っていた腹芸には感服した。その調子なら立派な伯爵夫人としての役もつとまるに違いない。ナアニ華族社会の女なんてものは偶然に取り当つた地位を自慢にして、自分以外の女を如何にして軽蔑しようか、蹴落けおとそうかという事ばかり寝ても醒めても忘れていない下等動物でしかあり得ないのだからね。しかもその御主人の栄位栄爵というのも、先祖が関ヶ原あたりで豊臣家に裏切つた手柄で、徳川将

軍から貰った大名の地位が變形したものに過ぎないのだからね。これに反して市會議員となると何もかも独力で成り上つたのだから堂々たるものだ。その点からいうと華族なんぞより身分が上だ。唾川のお父さん、この花嫁を仇あだやおろそかに思うてはなりませんぞ」

小伯爵が横合いから吾輩の手を握った。

「イヤ、鬚野先生……どうもありがとう。実はあの上海亭の二階で貴方のお話を聞いているうちによつほど飛出してお礼を申上げようかと思つたんですが、万一貴方が、親爺の廻し者だったら大変と思つて……プツ……」

小伯爵は慌てて口に手を当てた。眼を丸くして老伯爵をかえり

みた。老伯爵が不承不承に疎まばらな齒あらを露あらわして笑った。

「アハアハアハ。何でも宜ええ。これから仲よくしてくれい」

吾輩は黙ってシャツポを脱いで、袖のないマントの肩で風を切つて、豪華な応接間を出て行きかけた。

安心したので急に酔いが上がって来たものらしい。フラフラしながら扉ドアにぶつかつた。

「おお、鬚野君。まあええじやろ、ゆつくりして下さい。一パイ差上げるから」

「先生。御ゆつくりなさいませよ」

「イヤ、モウ運命の神様は辞職だ。アトは女将によろしく頼むわい」

「そう云わずとこの家に泊^{うち}って行^うってはドウかな」

「この家は暑いです。イヤ、若夫婦万歳」

吾輩は廊下の空間を泳ぐようにフラフラしながら表に出ると、流線スターのセダンが待つていたので、その中に転げ込んだ。動き出すと運転手が聞いた。

「どちらへ……参りましたようか」

「帝国ホテルだ。……その帝国ホテルの裏手の空地になあ……その空地に並んでいる土管の右から三番目の入口へ着けてくれい。ああ、愉快だ。赤い帽子を冠ろうよ才だ。アツハツハツハツ。皆さん左様なら……」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1991（平成3）年12月4日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5・86）を、「関ヶ原」は小振りに、「一ヶ月」は大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年12月6日公開

2006年3月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

超人鬚野博士

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>